
I.o.method

鈴木真心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I . o . m e t h o d

【Nコード】

N 2 7 3 0 P

【作者名】

鈴木真心

【あらすじ】

打倒、ろくでなし悪女な姉を掲げて旅する白髪に褐色肌の魔女ウインズ。ひょんなことから人狼拾って。ひょんなことから魔剣と遭遇！？

魔力ある者は永きを生きる世界で繰り広げられる、壮大なラブファンタジー開幕！

In own method

この物語は全てにおいて、ある姉妹から始まっている。

とある世界、とある時代のとある国、とある場所に彼女達はいた。二人には永きを生きるだけの魔力があり、姉は見事な金髪に金色の瞳を持ち透き通るような白い肌、妹は白髪はくはつに黒い瞳を持ち褐色の肌をしていた。

二人は異母姉妹であつた。

絶世の美貌を持つ『白き魔女』と讃えられた姉は、魔術師の中でも特異な能力を持つ妹が気に入らなかつた。

「あんたがちやほやされる国なんか、滅びちゃえばいいのよね」

国の上層部に美貌で取り入った姉は、あれやこれやと策を巡らし、一国を崩壊へと導いてしまう。

「あんた、何てことしてんの！」

「だって気に入らなかつたんだもん」

この物語は、とんでもない悪女の姉と、とばっちりを食らったお人好しな妹の壮大で壮絶な姉妹喧嘩である。

妹は『風の魔女』と呼ばれていた。

I n o w n m e t h o d (後書き)

『 I n o w n m e t h o d (イン オウン メソッド) 』 和訳
/ 自分自身の方法で。

獣人とお姫様

世の中には時として、奇怪なことが起こるものである。

それはこの世に、魔力によって永きを生きる者が存在するように。
それはこの世に、姉と妹がいるように。

「……」
「……」

彼は無言だった。

あたしも無言だった。

彼は倒れていた。

あたしはそれを見つけた。

「……じゅうじん 獣人？」

小鳥の囀りが清々しい緑の森の中、ぱったり出くわしたのは、行き倒れの獣人な青年だった。

一方的に出くわしただけだけど。

あたしの呟きに、ぴく、と真っ黒い耳が小さく反応する。
うつ伏せなので、顔はわからない。

わからないまま、知らなかったことには出来まいか。

出来……ないよなあ。

「ちょっとあんた、獣人が森で行き倒れてどうよ。しっかりなさいな」

「……うーん……」

「うーんじゃなくて」

一応、意識の確認を試みる。

気配と反応からするに、死んではいないらしい。
たぶん……

「お……お腹が……」

「減ってんのね」

だと思った。

獣人なのに、どういう了見だ。
仕方がない。

あたしは情け深いのだ。

「ほねいはんはりはどう！やはひーね！」
「何言ってっかわかんない」

手持ちの握り飯を与えてやったなら、飛び起きて食らいついた。
ついでに、あたしの手もちよっぴりかじられた。
痛い。

「お姉さんありがとう！優しいね！」

「ああ、そう」

あつという間に三つ平らげた彼は、にこつと八重歯だか犬歯だか牙
だかを見せて笑った。
真っ黒な瞳は、くりくりとして犬っぽい。
獣人なんだけど。

「あんた、人狼族？」

「俺、ジタン・トーチ！」

「種族を聞いてんの」

「お姉さんは名前は！？」

どうやら自由な気性のようだ。

あ、面倒くさいかも。

ちよっぴり目眩がした。

自由過ぎる奴をよく知っている。

奴は、周りを振り回したあげくに「美人は何したっていいんだもん」
とか、意味不明な利己的発言をするとんでもない悪女だけれど。

彼を一瞥した。

真っ黒い無造作な短い髪と真っ黒な耳に尻尾、真っ黒な瞳、毛並みはいい。

白い肌とのコントラストが、端正ながらも人懐こい顔立ちを際立たせている。

そしてその無垢な瞳は、きらきらとあたしを見つめていた。

「ウィ……ウィンズ・ゼロムス……」

負けた、と思った。

「ウィンズ……ゼロムス……？」

「……何よ」

何故か記憶を探るように首を傾げたジタンに、少しだけ身構える。

……知ってるのか？

いや、いやいやまさかね。

ただ、人狼族は長寿だ。

あの時代に生きていたとしたなら、知らないとも言いきれない。

ジタンが人狼族かどうかは定かじゃないが、人狼族じゃなければ何なんだ。

兎族の耳でもないし、妖精族でもないだろうし……。

とにかくどうなんだとこっさり観察していれば、「あっ」とジタンが声を上げた。

「ど、どうした？」

「俺、ウインズのことわかんない！」

あ、そう……『も』？

「あんた、いくつ？」

「わかんない」

「名前はわかるんだよね」

「ジタン・トーチ！」

「さっき聞いた」

年齢なんて、あたしだってわからないわけで、大したことじゃないけど。

わからないっていうか、覚えてられないっていうか。

ジタンをしげしげと観察する。

たぶん、人狼族。

外見年齢は二十代前半程度の青年まで成長しているから、人狼族の寿命や成長過程から考えても、最低で見積もって百歳以上かと思う。人狼族は森なんかでは、そう珍しくもない種族だ。

ただ、こうも混じり気のない真っ黒な毛並みは、永く生きてるあたりでも、見たことはない。

獣人と呼ばれる種族達は、太古の昔からこの世界にいた者達であり、少なくなってしまった妖精族と比べたなら、まだまだ数多く存在しているのだ。

ただ彼らは、人間が多くの大地を支配するようになったことで、純血交配が難しくなっていた。

人と交じり、人に混じり、純血種自体は希少となっている。

簡単に言えば、外見もカラフルになってきているわけだ。

つまり、ジタンが純血人狼であれば、かなりの希少価値があるわけだけど……。

「ジタンは、いつからなら覚えてるの？」

「うーんと……あ、ちょっと前に、洞窟で気がついたところから！」

あっけらかんと笑うジタンの言葉に、少しだけ、眉をひそめた。

洞窟で気がついた。

つまり、洞窟で覚醒した可能性がある。

そうなれば、記憶がないのもわからない話じゃない。

まさか、永きを渡って眠らされていた？

「どうしたの？お腹空いた？……俺、全部食べちゃった？」

……この子が？

きゅーん、と耳をへたれさせるジタンに、「え、何で？」と首を捻った。

でも、何か、何か、

「その洞窟、連れてつてくれない？」

何か、見捨てられない性分なんだよなあもう！

お人好しっていうか、子犬みたいな瞳に弱いつていうか、何でこうもあたしは、あの姉と違うのか。

同じには死んでもなりたくないけど。

「いいよー」とあっさり了解したジタンから、ばふんつ、と煙が上がった。

「やつぱり人狼か」

「背中に乗ってー」

虎くらいはあるだろう真つ黒な大狼に変化^{へんげ}したジタンが、ふりふりと尻尾を振りながらぺたりと伏せのポーズを取った。

それにしたって、人懐こいにもほどがある。

人狼族とはプライドの高い種族だ。

気に入った者としか話さないし、背中に乗せるのは主と認めた者だけだと聞く。

記憶がないとはいえ、こんなんで大丈夫か。

自分とは関係ない不安に苛まれつつ、せっかくの厚意と好奇心から、ふさふさの背中に乗せていただくことにした。

あ、毛並みがいいから、ふさふさの格が違う！

ふわふわのもふもふだ！

うつとりしたあたしをよそに、ジタンは、風のように森を駆けていった。

緑を抜け、地を蹴り、到底人では出せないスピードで風を斬るジタンは、あっという間に例の洞窟に到着して見せた。

流石は人狼族。

歩いてなら、半日は掛かるだろう距離だ。

「すごいね、ジタン」

頭を撫でてやったなら、えへへ、と嬉しそうにまた尻尾を振って見せた。

周囲をくまなく観察する。

洞窟を中心に、円形に木々がそれを囲み、中心から木々までの半分の位置には、やはり中心を囲むようにぐるりと石碑が立てられてい

る。

五芒星魔法陣か。

一つの石碑に歩み寄ってみたなら、風化が激しかった。手入れはされておらず、所々に蔓が這い苔蒸している。

星の角数は、多いほど効力は高い。

ただ、自然と石碑を媒体としているなら、その効力は単純に考えても1・5倍にはなる。

後は術師の能力の問題だ。

石碑を見て回れば、それぞれにも五芒星が刻まれており、斜めに黒ずんだ署名が走り書きしてあった。

「これ、誰の名前かわかる？」

まだ大狼なままの後ろに控えていたジタンは、くうん、と一鳴きして首を捻った。

やっぱり、わからないか。

「その黒くなってるの名前なの？ だいぶ古いみたいだけど、血の匂いがする」

「人間の匂い？」

「違う」

それぞれ体臭があるように、種族によって血の匂いも違う。
ジタンの鼻が違うというなら、間違いなく、人間でない者の血名だ。けつめい

「これは魔法陣なの。その上に血名を書くことで、ここは完成されてる。他の石碑も嗅いできてくれる？」

「また撫でてくれる？」

「もちろん」

どういった理由で魔法陣の中心に洞窟があるのか。
やはり、ジタンは封印されていたのか。

何故か。

知ることが全てよしとは限らない。

でも、それがわかれば、あの子の種族の集落を探せるかもしれない。

何もわからないのは、きっと、不安だろうから。

洞窟の前まで移動したとき、早くもジタンが駆けてきた。

「あのね、全部人間じゃなかったよ！でね、皆違う人だった！」

違う人？

頭を出してくるジタンを撫でながら、もう一つ 洞窟前の石碑の

血名を目にして、あたしはむかつ腹が立っていた。

血名はほぼ風化して読めたものじゃない。

刻まれた魔法陣の溝に、黒ずんだものが溜まって固まっているだけだ。

わかってる。

これは、ただの勘。

でも、この抑えきれないむかつ腹が立つときは、よくよく知っている。

「この石碑の血も嗅いでみて」

「どうしたの？ ウィンズ、怒ってる？」

「勘違いなら落ち着くと思うから」

数回、ひくひくと鼻を鳴らしたジタンが、ひょいとあたしまで嗅ぎ出した。

「違うけど、ウィンズと似た匂いがする」

「やっぱり！」

ジタンの顔が僅かに歪み、「腐った林檎、知ってる」とか何とかぶつぶつ言っていたが、あたしはそれどころではなかった。

ほぼ原形を止めない血名からでも、あたしは奴がわかるのか。まさに、これぞ血の絆と言うべきか否か。

「せっかく背中に乗せてくれたのに、ごめん。先に謝っとく」
「何が？」

すぐに明るいあっけらかんとしたジタンに戻り、それにちくつと、
胸が痛んだ。

「あんたはたぶん、ここに封印されていた。理由はわかんないけど
……たぶん、状況からして、かなり永く」

ジタンの顔が見られない。

少なくとも、この子の時間を奪ってしまったはずだから。
この子が過ごすはずだった人達との時間を。

そして一番許せないのは、

「この最後の血名　あたしの姉のものだと思う」

最低にして最強の悪女、『白き魔女』。

厄介なことにこの悪女は、正真正銘、あたしと血の繋がった姉だ。

「へー、お姉さんなんだ！」

なんだ！って……。

ぽかんとしたあたしをよそに、へー、へー、としきりに嬉しげなジタン。

「お、怒んないの？あたしの身内が、あんたを……」
「やっぱり、ウィンズは俺の主様だあるじさまね！」

「そうだよね、そうだと思ったんだ！」とか何とかかんとか。
はしゃぐジタンに、より、ぽかんとした。

全然、わかんない。

「主様と出会えることはね、すごいことなんだって！この世界は広いから、なかなか出会えないんだって！」
「それ、人狼族の……」

人狼族は主と認めた者しか背中に乗せない。
話さない。

懐かない。
懐かない……な、懐いてた……。

「懐いてた

！！！！！！」

「すぐわかったよ、俺すごい！」

ふみふみと可愛らしく懷きまくってるジタンに、思わず、頭を抱えた。

何が！？

何で！？

何がどうだったわけで、いつから何故にあたしが主様だと！？

「たぶん、間違いなく、あんたの時間を踏み躪った張本人の身内だよ！もつとよく考えて！」

まるで聞いてないジタンの尻尾はふりふりだ。
嬉しくて仕方ない雰囲気、そこかしこから滲み出てる。

「だって、わかるの」

「どうやって」

「野生の勘！」

どういう継承の仕方してんだ！

そりゃあまあ、人狼ってくらいだし、本能的な勘は人間に比べたら何倍も優れているに違いないけど……。

「あのねー、ウィンズ」

「とにかく、主様云々は置いてくとして、」

いつの間にか、ジタンは人型に戻っていた。

とにかく今は、一応、洞窟の中も確認しておくに限る。

あのろくでもない姉が、あたしにわかるよう、わざわざ血名を残しておいた辺りから察するに、明らかな嫌がらせとしか思えないけど。あいつが血名を必要としないほどの魔術師であることは、重々承知の事実なのだから。

とか、うんうん考えていた瞬間。

ちゅ。

顎を取られ、目の前には、黒で縁取られた睫毛があった。ちく、と、左手の甲に走った痛みと共に。

し　　ん。

ちちち、と小鳥の囀りがする。

さわさわと、緑の葉擦れの音がする。

触れた唇は少しだけ啄むように確認され、すぐに離された。

し　　ん。

「俺のお姫様」

し　　ん。

「お、お姫様じゃな
んだな！」

「だって俺のお姫様」

い！やっぱり！勝手に契約の儀を結

案の定、軽く痛みを走った左手の甲には、古代人狼語で『汝、我が主として此処に絆を印す』とある。勢いよくジタンの左手の甲を確認したなら、同じような印が浮かんでいた。

「何をやってんの……」

「洞窟は見ないのー？」

脱力するあたしを気にすることなく、また、自分を封印しただろう身内であることも全く気にせず、うきうきなジタンは、早く早くと背中を押して急かすばかりだった。

やっぱりこの子、すごく心配。

こうしてあたしは、全く意志とは関係なく、ジタンの主様とやらになってしまったわけだ。
何がどういうわけだ。

仕方ないことは仕方ない。

今は取り敢えず、洞窟も確認すべきだった。

洞窟、というか人一人入れる程度の石の祠といったところか。
つまりだ。

「やっぱり。どこかに通じてる」

3メートルほどいったところで石の壁に突き当たる。

実物は、これでおしまいということだ。

この先に…… ああっ!?

「く、崩れてる!」

いかにも魔力で封印してます的な石壁の一部が、大きく崩れていた。
見たところ、あたしじゃ解析不能な魔法陣が描かれている。

しかも、崩れてるのは真ん中。

残された残骸には、また誰かの血名の痕跡。

「あ、あのねウィンズ」

「……何」

座り込んで残骸を手にするあたしに、恐る恐る、ジタンが口を開いた。

「俺、あの……ここから出てきたのは、覚えてて……あの、」

見上げたなら、へたりとした耳は、ふるふるとしていた。

「あの……お腹、空いてて……そこ、寄っ掛かっちゃって、く崩れ、ちゃった……」

ごめんなさい、と小さく言って、隣にしゃがみ込んだくりくりの瞳が、うるうるとあたしを映していた。

お前か。

無言で残骸を目の前に差し出せば、素直に、すんすんと匂いを確認する。

「さっき嗅いだ人達の誰か？」
「……違う」

もう泣きそうだ。

これは流石に……怒れない。

ぽんぽんと頭を軽く叩いてやれば、一瞬にして、花が咲いたかのよう
に笑顔になった。

「ウインズ、だいすきー！」

「はいはい」

溜め息が出たけど、よしよしとまた撫でてやった。

ぎゅぎゅうと抱きついてくるでかいガタイを引きずりながら、ど
うにかこうにか外に出る。

この短時間で、ジタンの扱いには慣れたらしい。

何はともあれ、この子の過去には、あいつが絡んでいるのだ。
面倒見るしかないじゃないか。

せめて、謎が解けて、自分の在るべき場所へ帰れるまでは。

結局あたしは、とんだお人好しなのだ。

「ジタン、行く宛てはあるの？」

「ウインズという！俺のお姫様だから！」

「……ああ、そう」

ちよっぴり遠い目をしながら、やっぱりね、と肩を落とす。

「じゃあ行くか」

「背中に乗る？」

「よろしく」

ぼふん、とあがった煙に、小さく笑った。

お姫様ではないけれど。

飯屋にて

街が見えたのは昼下がりの午後だった。

というか、ジタンを見つけたのが昼前だったことを考えると、洞窟を調査した時間も踏まえて、あり得ない速さで森を抜けたことになる。

一応あそこは、新たにあたしが魔法陣を張ったので人目にはつかないはずだ。

「そろそろ降ろして」

「街はすぐそこだよ」

「だから、変化を解いて入ろうね」

やっぱり、そのまま入るつもりだったか。

「あのね、もうちょい警戒心を持ちなさい。あんたはどうやら純血種らしいから、大狼の姿だといろいろ危ないの」

「ふうん。わかった！」

素直なのはいいんだけど、どうもなあ。
本当にわかってんのか。

ぼふん、と人型に戻ったジタンが、にこにこしながら無理矢理腕に

絡みつく。
またか。

「そんな心配しなくても、あたしは大丈夫だから」

「魔術師だから？」

「まあね」

さつき張り直した魔法陣を見てたろうから、魔術師と目星をつけ
たらしい。

その程度の思考回路があつて安心する。

突拍子のないところばかりが目立つ気がして、まだまだ心配は拭え
ないけど。

「ウィンズは、珍しい魔力を持ってるんだねー。風を使えるんだ」

さらりと投げられた言葉に、ぎよつとして目を見張った。

「何でわかんのか!？」

心底びつくりしたのだ。

それに連動して、足はぴたりと止まっている。

きよんとした端正な顔が、逆に、疑問符を飛ばしていた。

「何でって、ウィンズは主様でお姫様だから」
「は？」

負けじとあたしも疑問符を飛ばす。
あれ？とまたまた疑問符を飛ばしたジタンが、一応とばかりに説明を口にした。

「さつき契約したでしょ？あれやると、主様のだいたいのことがわかるんだ。繋がったってことだから」
「繋がった？」

絆したとか、そういうこと？

と、またまた疑問符が飛んだところで、その無垢な笑顔に似合わないあらぬ発言があたしに放たれた。

「セックスしたみたいな感じ！」

し　　ん。

「どこでそんなん覚えた！？」
「知ってるよーだって一応大人だもん」
「やだ！ジタンがそんな言葉を吐くなんていやだ！ふわふわで無垢できらきらしてるのに！」

あんなに素敵な毛並みで、笑顔だってそりゃもう無垢で、くりくりの瞳はきらきらで、容姿だってそりゃもう美少年そのものなのに！
青年だけど！

成長過程からしたら、青年くらいなんだけども！

身長だって普通より高いくらいで、あたしより全然高いんだけども！

ていうか、そんなこと覚えてるくらいなら、もっとこう、必要なこと覚えてて欲しい！

「しょうねーウィンズ」

「何を言っただあんたは」

見掛けに騙されたが、曲者かもしれない。

結局、がっちりぎゅうぎゅうと腕を放さないジタンを引き連れて、
「すぐえバカップルもいたもんだ」とか見知らぬ人にこそこそと言われながら、ようやく、一軒の飯屋に辿り着いた。

バカップルって死語じゃないの？

あ、涙に瞳が負けてしまいそう。

年季の入った木製のドアを開けたなら、カランカラン、と錆ついたベルが小さく鳴った。

「いらっしゃーい！……て、ウィンズじゃない！」

「久しぶり、ターニャ」

昼飯時を過ぎて落ち着いたらしい店内でテーブルを拭いていた彼女は、素っ頓狂な声で出迎えてくれた。

彼女はターニャ・イザベラ。

金髪碧瞳の見目麗しい、この飯屋の女主人だ。そして、旧友でもある。

「落ち着いたとこ悪いけど、飯食わせて……ターニャ？」

ターニャの碧い瞳は、あたしを見てはいなかった。

「……また、珍しいの連れて。あんたのダーリン？」

「この子はちが」

「ジタン・トーチ！ウィンズのダーリンになるの！」

否定は呆気なく遮られ、またもジタンはすき勝手にほざいてくれた。

ダーリンとか、知ってたんだ。

無理矢理ジタンを剥がして、何とか席に座る。

隣に座ったジタンは、ずっと上機嫌だ。

おとなしくしてくれるなら、この際、何でもいい。

「あたしは豆腐サラダと牡蠣グラタンとアイスコーヒー。食後にアップルパイね。ジタンは？」

「うんと……知らないメニューばかりだなー。あ、カツ井と親子丼とハンバーグの卵焼き乗せといんげんと卵の和え物がいい！後ね、バナナシェイクは知ってるからそれにするー！」

卵ばかりだ。

それにしてもよく食う。

少し、仕事を増やすべきだろうか。

メニューを伝えに行ったターニヤの背中を眺めて、ジタンはにこにこしていた。

「ウインズの大切な人なんだね」

「それもわかるんだ」

「繋がってるから。ウインズの気持ちが伝わってくるんだよ」

あたしにはわからないんだろうか。

何て一方的な絆だ。

「ウインズは……俺のこと、嫌い？」

うるうると捨てられた子犬のような瞳で、またも攻撃を受ける。

どうやらあたしは、この瞳に弱いらしい。

「嫌いじゃないよ」

「ウインズだいすきー！」

椅子を蹴散らして飛びついてきたジタンに、はあ、とまた肩を落とした。

食前に運ばれてきたドリンクを前に、厨房を任せたらしいターニヤが席に加わる。

「で？ダーリンじゃないってことは、どういう経緯があって連れてくるの？」

ホットティーを優雅に啜りながら、にこりと極上の笑みを浮かべる。述べる、と、その笑みには威圧感が含まれていた。

「拾ったのよ、さつき」

「警戒心の強いと言われる人狼族を？」

まだ何かあるだろ、と、笑みは凄みを増した。

「お腹が空いて、行き倒れてたんだ。ウインズがご飯をくれて、助

けてくれたの」

空気を読む能力があったのかと、感心する答えだった。

洞窟云々は、言う必要はない。

うっかり口を滑らせようものなら、どこであいつの耳に入るか、わかったものじゃないのだから。

ちなみに。

ジタンの態度は、全く空気を読めてない。

未だ、あたしにひつついたままだ。

ちゃんと座れと言ったなら、ぴったり隣に椅子をくつつけて座った。

ふうん、とあやしげに目を細めたターニヤが、あたしの左手に視線を留める。

手持ちのグローブに術を掛け、契約の印は端目ではわからないようにしたつもりだ。

もちろん、ジタンの左手にも、同じものを嵌めさせた。

「それ、手の甲に魔力増幅石ブースターが嵌めてある特注品よね。なかなか手に入る品じゃないのに、さっき拾ったジタンに片方あげたの？」

……しまった。

そこまで頭が回らずに、手持ちで急いで術を施行したのでうっかり

していた。

ターニヤが言う魔力増幅石とは、かなり貴重な鉾石を使って作られた代物だ。

これ一個で、それなりな新築の一般居住用の家が五軒ほど建つ。

しかも、あたしの持っているこれは、自らの魔力を封じ込めた特注品だった。

何でこいつは、こんなに鋭いのか。

いや、あたしはかなり焦っていた証拠か。

ぱんつと手を叩いたターニヤは、恐ろしいほど、壮絶な笑みを浮かべた。

「食事は部屋で取りましょう！心配しないで、うちは宿もやってるから」

溜め息は深かった。

ジタンは心配そうにあたしを覗き込み、ついでとばかりに、口元をぺろりと舐めやがった。

「コーヒーって苦いね」

「苦いよ、本当にもう」

あたしのペースは、乱されっ放しだ。

引っ立てられるように部屋に連れられ、ぱたん、と無情にもドアは

静かに閉められた。

かちり、と小さく錠の落ちる音がして バチバチッとドアの内側に魔法陣を描いた閃光が走る。

術まで施行して見せるとは。

もともとターニヤは、過去、同期の魔術師だった。
いわゆる一流と呼ばれる魔術師であり、同じ仕事を請け負うことはしよっちゅうだったのだ。

「ターニヤも魔術師？」

「そうよ。結婚して引退したの」

これだけの美人なら引く手あまただったのに、ターニヤが選んだのは、飯屋の主人という平凡な男だった。

まあ、気持ちはわからないでもない。
能力や肩書きをひけらかして容姿しか見ない奴らに、辟易していたのは知っている。

「ご主人は？」

「もうとつくに死んだわ。普通の人だったからね」

ジタンは軽はずみな言葉に、あ、と小さく漏らした。
みるみる悲しそうな顔になるジタンに、ターニヤは笑った。

「気にしてないわ。選んだのはあたしよ」

「う、ごめんなさい」

「……いい子ね」

ターニャは静かに、微笑んでいた。

隣で落ち込むジタンの頭を、ゆっくりと撫でてやる。

「ごめんなさい」と、小さく、消え入りそうな声が耳を打った。そのままあたしに移された視線は、打って変わって、威圧的だ。明らかに好奇心混じりで。

「ジタンと、契約を結んだわね？」

「流石、才女と謳われたターニャ・イザベラ」

完全にお手上げだった。

「俺が、勝手にやったんだ！ウィンズは悪くないんだ！」

何をどう思ったのか、あたしを庇うように間に入ってジタンが叫んだ。

感情の機微までは、どうやら理解出来ないらしい。よしよしと宥めてやれば、結局また、思い切り抱きつかれてしまった。

手間の掛かる犬を拾ったもんだ。

「……ずいぶんと懐いてるのね。さっき拾ったんでしょ？」

「まあ、そうなんだけどね」

よく、犬にとって一瞬は一生の恩と言うが、あれと似たものだろうか。

一生は……どうだろう。

困り果てたあたしに苦笑いしたターニヤが、優しく、ジタンに話しかける。

「ジタンは……契約がどういうものか、わかっていて施行したの？」

それは、あたしも気になっていたことだった。

『契約』とは、強く望んだなら、ある程度の魔力があれば施行可能な術である。

施行の仕方は種族や術者によって異なり、現れる印やその場所もまた様々だ。

どういった契約内容かにより異なるが、基本的には、自分より魔力が下回る者を従えるために施行する。

ただ、ジタンに関して言えば、魔力自体は明らかにあたしが上回っている。

それくらいは魔力があれば、自ずとわかるのだ。

つまり、ジタンが施行した契約は、人狼族独特の術であると言える。事実、あたしはジタンの主であると印されているのだから。

契約の印に、偽りはない。

「一生、ウィンズはあなたの主であるということよ。あなたは、それがどういうことか、わかっている？」

続けたターニヤに、ジタンは真っ直ぐ見つめ返した。

「わかるんだ。ウィンズは俺の主様、俺のお姫様なんだ」

あまりに真っ直ぐ言われたからか、ターニヤでさえ、呆気に取られてしまっていた。

お姫様とかはつきり言われて、よく噴かないなあ、ターニヤ。

あたしだったら、旧友がお姫様呼ばわりされたら、たぶん噴くと思った。

しばらくして。

「ぶふっ、あは、あははははー！ごめーん！だって、ウィンズがお姫様って……！あははははー！」

やっぱり噴いたか。

いかにも女らしいターニヤと違って、褐色の肌に真つ黒な切れ長の瞳、真つ白なロングをさっぱりと高く一つに纏めているあたしは、どう転んでもお姫様とはいかない。身長だってジタンよりは低くとも、小さいわけではないのだ。

「ウインズは綺麗だよ！綺麗なお姫様だもん！」

そこで剥きにならなくていいから。もう聞いてて恥ずかしい。

「つまり、ジタンのお姫様なわけだ」

にやついたターニヤの言葉に、何を思ったのか、ジタンは急に花の咲くが如くの得意な笑顔を浮かべた。

「俺のお姫様だよ」

「もうやめてください本当に」

聞いているだけでぐったりしたあたしに、二人の笑い声だけが響いていた。

結局、主になった理由は、あたしには見当がつかなかった。やっぱり恩てやつだろうか。

主云々は、ターニヤの中で納得がいったらしい。わからないのはあたしだけだ。

それはそれとして。

「まだ何かある？」

「あるわね」

陣を解かないとはつまり、そういうことだろう。

思わず飛び出た溜め息は盛大で、それにつられて、肩の上下も激しかった。

ターニヤは旧友、その中でも、最もと言っても過言じゃない。

彼女は、あたしの全てまでいかずとも、現在に至る根源を知っている。

「まだ、『白き魔女』を探しているの？」

「まあね」

あいつのしたことは決して許せるものじゃない。

そして今なお、どこかしらで善悪の判断なく、思っがままに周囲を混乱させているに違いないのだ。

やばい、またむかつ腹がぶり返してきた。

「あいつはね……あいつは、『最高の魔術師』と謳われたあのスピカ・トラウスと肩を並べるほどの美貌とか言われていい気になつてんのよ！スピカだつて、そりやあたしは気に入らないけどね！？わかる！？でもあの女は『美人は何してもいいじゃん』とか言つて、意味もなくなただあたしへの腹いせに一国を滅ぼしちゃうようなばかたれなの！ばかたれもいいとこなのよ！放つとけないでしょ！？ばかたれな上に美人で悪女なんだから！」

はあはあと息切れよろしくまくし立てたなら、ジタンもターニヤも、目をまるくして固まっていた。

「ま、まあ、落ち着いてウインズ」
「落ち着けない、あれが姉だと考えると、あたしは……落ーちー着ーけーなーい……………」

ドガ ン！

「はあっ、はあっ、ちょっと落ち着いた……あ、やべ」

自分で魔力を暴発しておいて、咄嗟に防御陣を発動するとは、あたしもなかなかやるもんだ。
じゃなくて。

部屋中、見るも無惨に瓦礫の山と化していた。
魔力増幅石が反応して光ってるってことは、ジタンにも同じように
防御陣が発動してるから大丈夫だろう。

「けほつ、これがウインズの『風』？」

やっぱり。

ターニヤも大丈夫だろうけど……

「……ウインズ……」

「あ、よかった。ちゃんと防御陣発動したんだ。部屋もほら、あんなの魔法陣で外への被害は免れたね！流石、才女と謳われた……」

あ、やばい。

「ウインズ

！……！！」

「ごめんなさい

！……！！」

ドガ

ン！

ターニヤの激昂により、部屋はまる焦げになった。

「げげげほっ……これはターニヤのせいだからね！」
「あんたのせいだ！」

あたし達のあまりの激情ぶりに、ジタンはただ、片隅で怯えていた。

「……どっちもこわいよう」

祈り

「ちょっと休憩行ってくるからー」

その後。

結局ターニヤに逆らえず、この飯屋で、せつせと修理代を稼いでいる。

こんなことをしてる場合じゃないけど、動くための手掛かりはゼロだ。

「ありがとうございますー！ターニヤ、俺も休憩していい！？」

昼飯時を過ぎた店内を見渡し、ターニヤが笑顔で頷くのが見えた。思わず、体が固くなる。

「ジタン、待ってるから焦らない……でー！」

「ウインズ！」と満面笑顔で駆け寄ったジタンに、正面衝突よろしく抱きつかれた。

痛い……だから、焦らないでって……。

抱きつくというより、もはやこれは、タックルという名の攻撃に近

い気がする。

「あたしは主じゃないのか……」

「主様だよ、お姫様」

「……わかってない」

寧ろあたしがわからない。

押し倒された格好で溜め息を吐くのは、お決まりになってしまった。それでもジタンの頭を撫でてやるあたしは、何てお人好しなんだろうか。

まあ、嬉しそうだからいいけど。

そうは言っても、悪いことばかりでもない。

人に触れることで、ジタンは少しだけ、今の時代に慣れつつある。もともと人懐こいのと美少年面も相まって、今では、この飯屋の看板だ。

ただ、仕事が決まったときの最初のひとことには驚いたけど。

「俺、ウィンズのこと以外に興味ないからしない」

これには、流石のターニヤも固まった。

「だってウィンズにはやることがあるんでしょ？ウィンズがしたく

ないことをする必要はないよ。ウィンズ以外の人の命令は聞かない」

つまりだ。

ジタンの言い分によると、世界で一番大切なのは主であるあたしだということらしい。

よって、ジタンの中では、あたしがやりたいことが優先であり、嫌々なことはする必要さえないと。

そして、あたしがやらないなら、もちろん自分もする必要はないとわかるようでわからないというか、ある意味理に適っているというか。

「ジタン、やりたくないわけじゃないんだよ」

「ウィンズ、そのお仕事やりたいの？ウィンズがやるなら俺もやる」

「いや、まあ、ジタンはすきにして構わないけど」

もともと、あの騒動にジタンは関わっていなかったのだから。

と言う前に、ジタンが口にした科白は、またも、あたしの脳天に衝撃を与えたのだ。

「ウィンズは俺の世界だから、ウィンズの言うことが全て」

花の咲くような無垢な笑顔で。

以来あたしは、自分の言葉に注意を払うようにしている。

主であるあたしが気を遣うなんて笑えるけど、それでジタンがいろいろなことを学び取る機会に恵まれるなら、やっぱりそれは、いいことだ。

「お人好しだなあ」

自覚するほどに。

休憩に入ったジタンに連行されながら、少しだけ、本当に笑ってしまった。

飯屋の裏手にある縁側に二人で座り、一息つくべく煙草をくわえる。ぱちん、と指を鳴らした先の火を点ければ、ふわふわと煙が昇った。いそいそとお茶を持ってきてくれたジタンを誉めて、その笑顔を肴に空を見上げる。

「ウィンズは煙草吸うんだね」
「ん」

魔術師は大抵吸うんだよ、と言えば、どうして？と返された。

「永いときの一瞬の暇潰しかな」

人狼族のように、種族の全てが長寿というなら、感じ方はまた違うのかもしれない。

ただ、永きを生きると言っても、あたしは人間だ。

普通に生まれていたら。

同じときを歩めたなら。

普通の人間を伴侶に選んだターニヤなら、少なからず、そんな葛藤があっただとあたしは思う。

人狼であっても、同じ選択をした者なら。

「魔術師で、魔力があつて。ウィンズは、それが嫌なの？」

隣の黒くも無垢な瞳が、悲しげな色を湛えて見つめていた。

「嫌じゃないよ。ただやっぱり、見たくないものも増えるかな」
「例えば？」

この子はどこまでも無垢だ。
それが記憶がないせいなのか、はたまた、本来生まれ持ったものなのか。

あたしにはまだ、わからないけど。

例えば。

「例えば、国が減びるのを目の当たりにしたり。例えば、大切な人が先に逝ってしまったり。例えば、魔力故にそういった手伝いをすることになったり」

それは、例えばの話なんかじゃないけど。

「煙草を吸うとね、そういうことを思い出すの。自分の小ささ、とか」

何も出来なかった無力さや、抗えなかった不甲斐なさ。そんなものが、立ち上る白煙の向こうに見える。そんな気がして、ときには古傷が疼くけど。

「忘れちゃいけないんだよ」

忘れてはいけない。

刻んでおかなければならない。

乗り越えて、前を見据えて進むため、生きるために。

「生きてるんだから」

「生きて、る」

「そう」

ジタンは静かに聞いていた。
きつと、あたしの気持ちが伝わっている。

主のそれを理解しようと必死なのが、顔に出ているおかしかった。

大丈夫、きつといつかわかるから。

祈りを込めて、あやすように優しく撫でた。

ふわふわとした黒い毛並みは、するすると肌に馴染む。

気持ちよさげに目を細めるジタンは、素直で無垢で、可愛い弟のようだ。

「いいこともあるんだよ」

「いいこと？何何？」

ぱあつと明るくなった顔に、ジタンが忘れないように、しっかりと伝えればいい。

「ジタンと出会えたのは、永く生きてたからでしょ」

そしてまた、理由は何であろうと、ジタンも生きていてくれたから。

誰であろうと、何であろうと、個々である限り、それは唯一。

唯一を大切に思える。

その唯一に出会い、そう思うことが出来る。

「誰であろうと、それは唯一。ジタンもあたしの唯一だよ」

代わりは効かない。

ジタンはジタンで、あたしはあたしだ。

これだけは伝わればと、ただ、消えていく白煙の向こうに祈った。

中央図書館

その日、給料日に発表されたターニャへの借金が半分になったとの
事実、あたしは浮かれていた。
よって、ジタンも浮かれていた。

予期せぬ嵐は、そこまで来ていたのに。

「ようやく半分か」

「俺ががんばった！？誉めてくれる！？」

「がんばったががんばった」

ジタンに出会って一ヶ月、ようやくこの甘えた小僧にも慣れ、ついでに仕事も慣れてきた頃。

たまの休みに本来の仕事でもしうかと、あたしとジタンは、街の中央図書館に向かっていった。

この街には膨大な量の本が貯蔵しており、魔術師間では知識の宝庫とまで呼ばれている。

図書館は中央、東西南北と五つあり、中でも、中央図書館は近隣に名を轟かすほどの貯蔵量だ。

治安もよく、魔術師は聖職者同様、崇拜の対象ともなっている。
同時に畏怖の対象でもあるが、それは仕方ないことだった。

「図書館かあ。俺、初めて行くよ」

「あの洞窟の魔法陣について、載ってるかもしれないからね」

隣接する森の情報だ。

大した収穫はなくとも、欠片程度は知ることが出来るかもしれない。

「俺のために!？」

「ウインズが俺のために、ウインズが俺のために」と呪文のように唱えるジタンに苦笑しながら、絡みつくでかい子を引きずって歩いていた。

立派な中央図書館に到着したなら、あまりの立派さに、ジタンはぽかんと大口を開けていた。

「やめなさい」

美少年面が台無しだ。

そもそも、ジタンには知識と教養が大幅に欠けている。

いくら永い時を封印されていたといえ、人狼族ともなれば太古から続く由緒ある獣人族。

永きに渡って培われた知識と誇り高きプライド、野性味溢れながらも洗練された教養があると、もっぱらの噂だったはずだが……。

「おつきーい」

欠片も見当たらぬい。

外見は青年でも、中身はまだまだ少年だ。
それはよろしくない。

そう、うつかりといえ、あたしがこの子の主となつたからには、教育を施す義務があるのだ！

「ジタン、よく聞いて」
「？」

にこにことした黒い瞳と目が合う。

……ばかつぱい。

「あんたは、勉強をしなさい」
「勉強？」

「そう、あたしが片手間で教えてあげるから」

如何にも体で覚えるタイプだが、上手く教えれば、それなりに身につくはずだ。

基礎がないだけではかじやない。
それは、一ヶ月で何となくわかつていた。

そしてあたしはこの一ヶ月で、ジタンの扱いもわかってきたのだ。

「がんばったら、ご褒美あげちゃおうかな」

「ごほうび……！」

顔の前に人参をぶら下げればいいと。

ジタンはそれはがんばっていた。

もともと共通語を読めるばかりでなく、何と彼は、人狼語はおろか古代人狼語までもを読み書き出来たのだ。
三時間足らずで兎族、狐族こねく、鹿人族語かしんぞくの基礎をマスターしたことは、流石のあたしも感心を通り越して脱帽した。

おばかに見えておばかじゃなかった……！

「えらい、えらいよジタン！」

これでもかと撫でつけてやれば、それは嬉しそうに喜んでがんばるものだから、また輪を掛けて誉めてやる。
完全に親ばかな気分だ。

「よくもまあ、するすると覚えるもんだね」

あたしでさえ、異種族語を覚えるには苦勞した。
たった三時間程度でこれだけ身につけられるなんて、天才としか思えない。

感心して見ていれば、ジタンは笑ってこう言った。

「これ全部、ウィンズが知ってることだよな」

頷いて見せれば、やっぱり、と何故かばつ悪そうに頭を掻く。

「ウィンズが知ってるから、覚えるのが早いんだよ。繋がってるからだと思っ」

なるほど。

契約とは、そういう共有の仕方もあるのか。
とはいえ、本当のばかならここまでは出来ない。

ということだ。

「魔術も……覚えることが出来る、とか？」

腐っても人狼族。

しかもジタンは、純血種だ。
契約の儀を施行したことから考えて、魔力皆無なわけではない。

「出来ないことはないと思う。ウィンズが魔術師だから。でも、全部は出来ないかも……」

伏せることなく真っ直ぐにあたしを見て、その黒が、あつという間にうつると悲しげに潤んでいく。
どうやらジタンは、とにかく、あたしの期待に応えられないのが心底悲しいらしい。

これもまた、一ヶ月でわかったことだ。

だからあたしは、

「無理はしないでいいから。ジタンは充分いい子だよ。がんばってるし、あたしは充分嬉しい」

ひたすら誉める！

誉めて誉めて、誉めちぎって育てるのだ！
そして、ひたすらに撫でる！

本当の親みたいない気分になってきた。

……それもどうなの。

「取り敢えず、魔術の歴史と基礎だけは読んで覚えようか。これなら、あたしも知ってることだし覚えられるはずだから」
「うん！」

元気よく返事をしたジタンに笑みを浮かべ、本を手渡してから、あたしはあたしのやるべきことを探しに席を立った。

今あたしのやるべきことは、取り敢えず、ただ一つ。

『歴史』と掛かれた本棚を見上げ、重厚さ漂うそこへ、挑むように足を踏み入れた。

人狼族の歴史、アギズス森林の歴史、アルジア国記、アルジア伝承記。

目ぼしい本を片っ端から取り出して目を通す。

薄暗い通路に小さな灯りだけを浮かべ、目を皿のようにしてページに走らせた。

アギズス森林とは、ジタンを拾い、洞窟があつたあの森のことだ。その隣のアギズス平野と呼ばれる広大な土地に、アルジアが建国されたのは五百年前。

……五百年前？

国記を膝に置き、人狼族の歴史を手に取る。
さらに遡ること百年、六百年前に、アギズスの人狼族ではシンギ・メロウを新しい族長に立てている。

たった百年で、いなくなるってどういうこと？

移住するにしても、あの森にはこれといった問題も見当たらない気がする。

また国記を手に取り、近い年代のページを開いた。

“アルジア建国時、族長シンギ・メロウ率いるアギズスの人狼族は、平野のみならずアギズス森林が荒らされることを懸念し、アルジアに宣戦布告。”

「三十年続いた戦火は、アルジア国將軍ジェイズ・カーネストが連れてきた『白き魔女』によって、終戦を迎えた”　！？」

やっぱりか！

歴史とは事実であっても、真実とは限らない。強者が作り、記し、遺していくのが歴史だ。

少しばかり目を離れた隙に、あの悪女はまた、やりたい放題してたということか。

むかむかとした感情は、深く深く、あたしの顔に皺を刻んだ。

あいつめ、いくつになったら更正するんだ。

せめて何をやるにしても、もう少しおとなしく出来ないもんか。あの『伝説』と呼ばれる裏魔術師だって、一応は、裏世界で行動し

てるといつのに。

目立ってるけれど。

「目立つのすきだもんなあ……」

ほう、と漏れた溜め息は、言葉と共に、ふいに拾われた。

「誰が？」

「……ん？」

背後から射した影は、薄暗い中でより濃くあたしを包んでいた。

「姉が」とはもちろん言えず、どちら様かと振り向いて、しばし記憶の糸を辿る。

「……」

「……」

きらきらと僅かな光さえ纏っては飛び散らせる見事な金髪は、無造作ながらも洗練されたショートヘアで。

影になっても透き通るほどの見事な碧い瞳は、人好きしそうな光を宿している。

二十代前半といったところの、すごくる見目麗しい青年がそこにいた。

「……」

「……誰だっけ？」

「ああ、やっぱりわかんないか」

あはは、と笑ったその顔に、ふと、旧友が重なる。

「……ターニヤの！？」

「久しぶり、ウインズ」

それは見事に母親似の笑顔で、彼は、ハスキーになった声でそう言った。

ジタンは不機嫌だった。

初めて見るそれは、何というか、とにかくわかりやすいほどにだ。

原因は彼　ターニヤの息子、イリツシュ・イザベラだと思う。
たぶん。

久しぶりに再会したイリツシュは、それは大きくなっていた。
最後に見たのは確か、十歳くらいの時だったか。
小さくてふわふわで、そりゃあもう、昔っから綺麗な子だったけれど。

図書館の奥の個人自習室では、現在、抱きつき虫と化したジタンがあたしの右腕をホルドし、向かいに座る笑顔のイリツシュに、何故か威嚇を開始している。

何なんだ。

「はじめまして。俺はイリツシュ・イザベラ。ターニヤの息子だよ」
「……」

笑顔なイリツシュを見事にスルー。

「ほら、挨拶は？」
「……しなきゃ、だめ？」

しない理由がわからん。

あたしの顔を見た途端、ぴんと立っていた耳がへたりと伏せる。
懇願するような瞳はお得意のうるうる攻撃で、ばしばしとあたしに
撃ち込んできていた。

だめだ、あたしが負けそう！
何がだ！

異常に警戒を見せるジタンに首を捻る。
どうしたというのか。
思わず漏れた溜め息に、びくーっ！と、ジタンの肩が揺れた。

ふるふると震える手が、皺になるほど、ぎゅうつつとあたしの袖を掴む。

「さっきからどうした」

「俺のこと嫌いになった!？」

……何で？

真っ直ぐな瞳は本気だ。

会話は成り立っていないが……推測するに、さっきの溜め息に反応したと思われる。

ああ、溜め息にも気を遣うべきか。

いや。

もしかしたら、ジタンはこわいのかもしれない。

誰かに厭われること、一人になることが。

そう考えたなら、出会ってすぐのあたしと契約をしたことも、何となくわかるように思えた。

自分にとっての絶対的存在を手に入れておきたかったのだ。

それがどう、お姫様と繋がるのかはわからないけれど。

「嫌いになんてなんないから。ほら、挨拶は？」

ぎゅう、と寄った眉間の皺が、どれだけ嫌かを物語っているが。

誰かに厭われることを嫌うなら、この行動はないか？

飯屋で働く時だって、あっさり否定を口にした。

あたしには嫌われたくないだけ、とか？

「困ったな」

あんまり困ってなさそうなイリツシュはそう言って笑い、ジタンの胸の内は計り知れないまま。

取り敢えず、ジタンとイリツシュは仲良くなれなさそうだった。

「……ジタン・トーチ」

あれから三十分後。

宥めに宥めて、ようやく自己紹介は済んだ。

しばらくはターニヤの飯屋に泊まるのだから、上手くやってもらわないと困る。

案の定、イリツシュは実家兼飯屋に帰るのだと言った。

「イリツシュはどれくらいうちを出てたの？」

ジタンがやる気をなくしたので図書館を出た帰り道。
警戒網を張るジタンを右腕に引っつけ、左側のイリツシュに問い掛ける。

「三年くらいかな。魔術師の修行に行ってたんだ」
「魔術師の！」

やはりターニヤの息子、魔力があったのか。
しかし……。

「ウインズならわかると思うけど、俺の魔力は微弱でね。ほとんど父さん譲りだよ」

そう、イリツシュから感じられるのは、僅かな魔力の気配のみ。
普通の人間より長寿だろうが、あたし達ほどではなさそうだった。

それを本人がよしとするか否か。

決めるのはイリツシュのみだ。

「だから、どっちかって言うと剣の修行かな」

背負った剣に視線を投げて、イリッシュは柔らかに笑った。

「そう」

魔術師を志すほどだ。

やっぱり悔しい思いもしたことだろう。

一瞥くれた剣は、見るからに何らかの力が宿るものであった。

イリツシュの魔力

赤い日が低く落ちようという頃、ターニヤの飯屋に着いた。

ジタンの警戒ぶりに、ターニヤまで巻き込まなければと不安が胸を過る。

この子の言動は予測不能なのだ。

「ターニヤ、戻ったよ」

カランカラン、と錆ついたベルを鳴らし、あたしとジタンは中へ入る。

何故かイリツシュは、立ち止まったままだった。

「イリ」

カランカラン。

あたしの言葉を遮り、今度は背後からお盆の落ちる音。

イリツシュへ向いた体を戻したなら、驚愕に目を見開いたターニヤがいた。

「ターニヤ？」

事態を飲み込めていないジタンは、疑問符を飛ばして首を傾げる。
あたしだってそうだ。

久しぶりの帰宅に驚いたとしても、二人とも、何かがおかしい。

「イリツシュ、あんた……魔力をどうしたの!？」

それきり立ち尽くすターニヤとイリツシュに挟まれたあたしは、何が
何だか、わからないままに動けなかった。

「ウインズ、ご飯食べよう」

につこり笑ったジタンだけは、違ったらしいけれど。

お前、空気読め。

ご飯ご飯とうるさいジタンを厨房に連れていき、卵卵とうるさいの
で、親子丼の作り方を教えつつ、カウンター越しに二人を見ていた。

黙っていたイリツシュがようやく重い口を開く。

「……………ごめん、母さん」

伏せたその目がターニヤを見ることはない。

ターニヤもまた、下を向いて拳を握り締めていた。

ちなみに、隣のジタンはわあわあとうるさくしている。

溶き卵をフライパンに入れば跳ねた油に飛び退いて悲鳴をあげ、鶏肉を炒めればまた右に同じ。

米が炊ければいい匂いがすると飛び跳ねて喜び……少しは静かに来ないのか。

そんな中でも向こうの二人の会話や様子が手に取るようにわかるのは、あたしの能力によるところが大きい。

この能力は魔力であってそれだけでなく、別物であるが故に、魔力を消費することなく使えるのが魅力だ。

「……何があつたの？あんたの魔力は……」

イリツシュの魔力？

つい意識を取られて、フライパンにする蓋が止まった。

ターニヤは一度唇を引き、一呼吸置いて、自らを落ち着かせようとしているらしい。

そして、より謎の深まる一言を口にした。

「どこへいったの？」

「魔力って移動するの？」

「あんたも聞き耳立ててたわけね」

ジタンと一緒に、首を捻った。

顔を見合せまた首を捻ってから二人に視線を移す。

「来てくれない？どうせまた聞いてたんでしょ？」

ターニヤとばつちり目が合った。

仰る通りで。

食うかはわからないが、出来上がった親子丼を四人分よそってテーブルに着く。

アイスコーヒーだけは作れるようになったジタンが、それもまた、四人分テーブルに運んだ。

「いただきます！」

重苦しい空気を打ち破り、ジタンの清々しいばかりの明るい声が響く。

ターニヤは少しだけ笑って、「いただきます」と手を合わせた。

「食べながら話しましょう。イリツシュも食べなさい」

こくん、と素直に頷いた青年は、紛れもなく、ターニヤの息子の顔をしていた。

姉と弟にも見える二人は、確かに親子なのだ。

「で、魔力がどうしたって？あたしを呼んだ意味は？」

気を遣って進めたいところだが、ジタンがいる限り、そうもいかない。

この子は空気を読まない天才なのだから。
だったら、早いところ核心を突いてしまった方がいいと思った。

箸が止まり、イリツシュはまた目を伏せた。

その視線は自らの背もたれへと滑り、掛けてある剣で止まる。

「本当は……本当は、魔力も母親譲りだったんだ。ここを出る三年前までは」

つまり、三年の間に何か魔力を失うような出来事があったと。

剣を取ったイリツシュは、それをあたしに預けた。

「見て欲しい」

これに何かがあるってことか。

サイズからすれば至って普通だった。

大きくもなく、小さくもなく。

両刃の剣だろうことは、鞘を見れば見当がついた。

持ち手の革はだいぶ擦り切れ、愛用していたことがよくわかる。

「これ、もともとはこいつが持ってたやつじゃないよ。いろんな匂いがするもん」

素早く匂いを嗅ぎ分けたジタンが、親子井からは顔も離さずそう言った。

流石は人狼と言ったところか。

さっきの会話も、その耳なら難なく聞き取れるはずだ。

イリツシュは嫌いでも、あたしが関わるなら協力は惜しまないらしい。

「後ね、それ、こいつの魔力の匂いもするよ」

突き放した声色からは、気に食わないけどね、と聞こえてくる気がしたけれど。

イリツシュの魔力の匂いがする、か。

あたしじゃわからなかったことだ。

やっぱり、磨けばジタンは、かなり使える子になるだろう。

するりと鞘を抜けば、見事な銀色が姿を現す。

そしてあたしは、息を飲んだ。

「……魔剣！」

久しぶりに目にした大物に、ターニャは、身を震わせていた。

魔剣の登場とは、はてさて、どうしようか。

なるほどね。

よくよく見たなら、鞘には魔力を抑える印が施されている。

剣身を抜いた途端に放たれた禍々しい気に、思わず顔をしかめた。

俯いたままのイリツシュの親子丼に手をつけたジタンは、まるで気にしてない顔だ。

「あんだ、匂わないの？」

魔力でさえ嗅ぎ分ける鼻を持つなら、この気の匂いはそれこそ、顔をしかめる程度では済まないはずだけれど。

「もっとひどい匂いを知ってる」

「もっとひどい？」

「思い出せないけど、腐った林檎みたいなやつ」

ジタンが不機嫌な顔をするくらいの匂い……興味はあるけれど、嗅ぎたくはない。

それはそれとして、この魔剣は

「『ダーインスレイヴ』だね。別名『鮮血剣』だっけ？ウィンズ、合ってる？」

まさしくその通り。

「今日、図書館で見た本にあったよ！俺、覚えてる！」

にこにこと尻尾を振るジタンに、呆気に取られた。

様々なものを共有するとはいえ、この記憶力はやはり凄まじい。

『ダーインスレイヴ』 その名は『ダーインの遺産』を意味し、別名『鮮血剣』とも呼ばれる貴重な魔剣。

闇の妖精ドヴェルグ族であるダーインが作ったとされ、一旦抜いてしまえば、鞘に戻るか破壊されるまで生き血を求める。

これが、『鮮血剣』とも呼ばれる由縁だ。

「そもその魔力を魔力で抑えてるわけね」

イリツシュは、小さくもはっきりと頷いて見せた。

世に伝説数あれど、永きに渡り様々なものを目にしてきたあたしは、何が伝説で何が違うかをよく知っている。

今では伝説と呼ばれる『ダーインスレイヴ』の所業の数々は、伝説でなく、全てが事実だ。

それを何故、イリツシュが持っているのか。

また、何故、イリツシュの持つほぼ全ての魔力で封印されているのか。

問題はここだった。

「語ると長いけどね」

諦めたように笑うイリツシュを、ジタンを撫でながら、頷いて促した。

「三年前、『氷の魔女』を頼りに、北に魔術の修行に出たんだ」

何か、聞いたことのある二つ名だな。

面倒なところを頼りにしたもんだと、呆れてターニャを見る。

大方、彼女の話をしたのはターニャ辺りか。

「本当はウインズか『宵闇よいやみの兎』に弟子入りしたかったんだけど……二人とも居場所がわからなかったし、『宵闇の兎』が弟子を取って話は、聞いたことがなかったからね」

まあ、『氷の魔女』なら、弟子入りくらいはさせてくれるだろうと踏んだわけだ。

居場所の特定も容易かっただろう。

あいつは基本的に、北の地を離れない。

「弟子入りして一年が過ぎた頃かな……師匠にある仕事 came たんだ」

「仕事ねえ」

「それだよ」

訝しむあたしの手元を指して、イリツシュは言葉を切った。

イリツシュが言うには、『ダーインスレイヴ』を持ってきたのは北の地を治めるイシュバジル国総統だったらしい。

「『伝説』と名高い裏魔術師ラジア・ゼルダのライバルと言われる

君に頼みたいって 師匠はそれに弱いから。もとより、総統閣下直々じゃあ、断るに断れないけど」

イシユバジル国は王政国家でなく軍事国家。

総統は国王と同等であり、断ろうものなら、流石のあいつでも追放されるだろう。

あいつはあの土地を気に入っているのだから、仕方ない話だ。

「狙われているから破壊して欲しいって言ってたよ。でも」

「『氷の魔女』じゃ出来なかった」

「そう……師匠では、剣の魔力に適わなかったんだ」

貴重な魔剣を破壊して欲しい、か。

強力な武器防具は、国にとっての重要な財産だ。

軍事国家ならば性能から考えて『ダインスレイヴ』は貴重に違いない。

倫理をなくしていなければ、使うことはないだろうけれど。

「でも、軍事国家だからねえ……」

「師匠も言ってたんだ。人間が人間である以上、欲望は捨てられない。軍事国家がこれを破壊するなんておかしいって」

あいつも疑ってたわけか。

空気は読めなくとも、世の理はわかるらしい。
永きを生きていれば、それくらいはわかるか。

「狙われてるって言ったけど、誰に？」

「わからない。詳しい話は、師匠しか聞いてないから」

イリツシュが唇を噛む。

滲んだ血の匂いに、ジタンの耳が反応した。

「ねえウィンズ、その剣、二人分の魔力が上掛けされてるよ。一人はこいつのだけど、もう一人は知らない」

でも、と続けたジタンは、嫌そうにイリツシュを指した。

「こいつから、そのもう一人の匂いがする」

と、いうことは。

「その通りだよ。ジタンは鼻が利くなあ……俺の魔力に上掛けして
吸収を抑えたのは、師匠だ」

イリツシュはこうなった過程を語ってくれた。

鞘ごと焼いても、高度なドヴェルグ族の防御術が働いて無傷。刺し貫き粉々にしようとしても無傷。

結局、魔法陣を敷き、剣を抜いてどうしようとしたところ、抜刀をしたイリツシュが剣身で指を切り、血に反応した『ダインスレイヴ』に魔力を吸収された。

「師匠が処置をしてくれなかったら、俺は死んでたよ」

力の籠もった口振りには、ただただ、無力である故の悔しさが滲んでいた。

あたし達は何も言えず、その場には、ひたすらに沈黙だけが流れていた。

ターニヤのちらちらとした視線を感じる。

言わんとすることはわかる、同席させた意味もわかる。

ターニヤは飯屋の女主人。

従業員がいる限り、店を閉めるわけにはいかない。

しかし、久しぶりに帰郷した愛息は、とんでもないことになっていた。

魔剣『ダインスレイヴ』の土産つきで。

「あたしがやるしかないってか」

「頼める？」

「そのつもりだったんでしょ」

お手上げ状態で視線を投げれば、不安が和らいだのか、ターニャはようやく笑顔を見せた。

千の花とまで謳われた笑顔を見ただけで、引き受けるには充分だ。

「母親似でよかったね」

「父さんだってハンサムだったよ」

「悪かったけどね」

イリツシュもほっとしたのか、安堵が浮かんでいる。

ジタンはどうやら眠いらしい。

ふみふみ言いながら、落ちてくる瞼と必死に闘っていた。

取り敢えず今夜はお開きだ。

「後片付けはやっておくわ」

「ありがとう」

ターニャの申し出をありがたく受け取り、覚束ないジタンを歩かせながら、あたしは脳味噌をフル稼働させていた。

ターニャの反応からして、イリツシュの顔は本人そのもの。

変装もしている風でなかったし、本人からも、そういった話は出なかった。

追われている様子もない　　追っ手の気配もない。

しかし、破壊を命じられた剣は、確かに彼が持っている。

鞘には術が施行されていた。

もとの封印と、新たに施行されていたのは、イリツシュが師匠と呼ぶあいつのもの。

鞘に納まった状態で、あれを『ダインスレイヴ』と見破ることは出来なかった。

限界を迎えたジタンをベッドに転がして、窓辺に腰掛け、一息つくくわえた煙草の白煙を追いながら、それらのピースをぱちぱちと組み立てていく。

剣身には、古代妖精語がびっしりと彫り込まれていた。

例えば。

破壊が出来ないとして、それを彫り変えることが出来るとしたら？
ドヴェルグ族は、その昔、イシュバジル国によって殲滅されたと聞くが、万が一、生き残りがいたとしたら？

破壊の可能性は、なきにしもあらず。

イリツシュの様子からして、彼はあいつに命じられて逃亡したと考えられる。

『ダインスレイヴ』の気配を消し、彼に持たせたことから、そうしか考えられないけれど。

魔術の修行が三年というのは、どう考えても短い。
でも、総統から依頼を受けてイリッシュがああなってから、少なくとも二年、彼はあいつの元にいた。

「わっかない」

修行してたってことか？

「ウインズ、まだ寝ないの？」

もそもそと、肩に上掛けを引っ掛けたまま、瞼を擦るジタンが起きてきた。

「ああ、ごめん。起こしちゃったか」

「うっん、大丈夫。ウインズ起きてるなら、俺も起きてる」

あたしの足元にぺたりと座って、膝に頭を預けるジタンをゆっくりと撫でた。

本当なら年頃のジタンとは別室が好ましいけれど、それを聞いたジタンが暴れて嫌がったので、それからずっと同室だ。
無理矢理ベッドに潜り込んできたこともあったが、ジタンは一切、あたしの嫌がることはしない。

べたべたしてくるけれど、時と場所もわきまえないけれど、ついでに空気だって読まないけれど。

どこまでも、ジタンはあたしに真摯だった。

だからあたしは、ジタンに応えたい。

その気持ちに、ひたむきさに。

少なくとも、ジタンが在るべき場所に還れるまでは。

「今日はいろいろ大活躍だったね」

これは本音だった。

誉めて育てるところじゃない。

ジタンはそれ以上の働きを見せたのだから。

気をよくしたのか、ジタンはぼろぼろと言葉を紡ぐ。

「あの剣ね、あいつの魔力を取り込んで同化しつつあるよ」

「同化？」

「うん。あいつの魔力が剣に溶け込んでる。鞘に納まった状態なら平気だろうけど、一度でも抜いたなら、普通は剣の魔力に拒否反応起こして死んじゃうと思うよ」

大事まで、ぼろぼろと零した。

上機嫌な口は止まらない。

「ウインズは大丈夫だよ。風が護ってくれてる。魔力に反応して、薄い膜を作ってたよ。あれ、無意識なの？」

……気づかなかった。

時にその特異性により疎まれ、仕舞には実姉からとんでもない仕打ちを受ける原因ともなった能力だが、なかなかどうして、無意識に大活躍だ。

そうか。

ジタンの魔力増幅器に手をかざして、光が灯るのを見つめた。

「何？」

「おまじない」

「あはは、変なの」

おまじないなんて、魔術を知る身では、ばかばかしいけれど、わかっているけれど、どうか。

燃え尽きた煙草を灰皿に押しつけて、白煙の残像を目で追った。

占い師の予言

現在、風を斬り、あらぬスピードでジラード荒野を駆け抜けながら、素晴らしい毛並みにひたすら埋もれている。

つまり、ジタンの背中に乗っているのだ。

面倒な盗賊にだって、このスピードなら鉢合わせする暇もない。何日も掛かる旅路も、このスピードなら一日あれば充分だ。ジタンがやる気満々なので、休憩はいらないようだし。

何て素晴らしい子か！

後でたくさん撫でてあげよう。

ちなみ、イリツシュの件を放り出したわけではない。それについて、イリツシュ本人より先に、調査に向かっているのだ。行き先はアルジア国より西、ラグト国の端にあるワーカー街。

「楽しみだなー」

他国に行ったことがないのか覚えていないだけか、ジタンの声は弾んでいる。

理由は何であれ、やる気があるのはいいことだ。戻ってからを思うと不安が過るが……いや、今考えるのはやめておこう。

「見えたよ、ウィンズ！」

視線の先には、これまた久しぶりな土地が見えてくる。

何十年ぶりだろうか。

あいつは元気だろうか。

ターニヤに会いに行った時のように、何だか嬉しくなった。

何百年生きていようと、会いたい人がいる土地がまだあることは、嬉しいものだ。

街の手前でジタンを人型に戻し、あたし自身の足取りも心なし浮か
れている気がした。

ここにいる人物もまた、旧友の一人であるからに違いない。

「誰に会うの？また友達？」

アルジア国とは違った趣きを湛える市場は、土気色のレンガ造りの
街並みに人を呼び、そろそろ夕刻を過ぎ夜になろうという時刻にも
関わらず、それは活気に溢れていた。

ジラード荒野とメメンテ砂漠に隣接するここは、商人達が立ち寄る
ことも多い。

通りには、色とりどりお国柄様々な人々が行き交っている。

ジタンはひたすら、目を輝かせていた。

「そう。凄腕の占い師に会いに来たの」

「占い師！本で読んだ！」

説明が省かれて助かる。

自由気ままなジタンだが、こうしてちゃんと、どこにいてもあたしの後をついてくる。

素直というか、従順というか、とにかく、それだけは安心だ。

後で土産の一つも買ってあげようと思った。

それはそうと。

「迷いそうだな」

何十年程度でも、街並みは変わる。

道を変え、家を変え、人を変え、時には国さえも変えていくのが時間だ。

さて、目的地までうる覚えで辿り着けるといいけれど。

どうにかこうにか記憶を手繰り寄せ、辺りを見回しながら路地裏に入っていくあたし達は、下手したら完全に怪しい者だと思った。

壁に張りついては、細い道を覗き込んで確認する。

「よし、誰もいないな」

目的が変わっている気がしなくてもない。

怪しい動きで素早く走り込んで、何とか、一軒の寂れた家に外れそうなおドアを見つけた。

ぎい、と鈍い音によって開かれた空間は、ひたすらの闇だった。ひよこつと覗き込んだジタンが「あ！」と声をあげる。

「あの人!？」

早い。

まだ入ってもないのに。

「夜目が利くのかい」

「うん!」

指先に灯りを点して、外れないようにドアを閉める。

そのずいぶん先　様々な道具に囲まれた最奥に、彼女は座っていた。

「騒がしい子だね。久しぶり、ピーチエ」

深くフードをかぶった老女が、優しく笑ったのが見て取れた。

狭い店内を何のその、興味深げにうろつくとジタンが見て回る。
お願いだから、何か壊したりしないでくれ。

いち早くビーチエの前まで到着したジタンは、元気よく挨拶をした。

「俺、ジタン・トーチ！お婆さんは？」

「ビーチエ・カザリだよ。よろしくね」

「よろしくね！」

差し出されたビーチエの手を握ってぶんぶん振り回すジタンに、慌てて制止を掛ける。

何を勘違いしたのか、今度は近くにあった椅子をかたかたと運んできた。

座れということらしい。

「人狼の子かい、ずいぶんと懐いているじゃないか」

「どうせ知ってるんでしょ」

「まあな」

「知ってるの！？すごい！」

ビーチエは大抵のことを知っている。

そして、ビーチエは大抵のことが見えるのだ。

「物知りお婆さんなんだよ」

あたしの紹介に、フードの下の口元が苦笑を浮かべた。

あたしが煙草に火を点けると同時に、ビーチェは引き出しから水晶玉を取り出す。

「早速だけど、よろしく」

後は待つだけでいい。

「ジタンに土産の一つもやるんだろ。この店から、好きなものを持つていくといい」

「いいの？」

「ああ、」

人嫌いのビーチェが、珍しくジタンを気に入ったらしい。

「長生きな者は皆、どうも辛気臭いがね。あんたとジタンは、明るいから好きだよ」

確かにね。

皆、永き時に食われていく。
確実に蝕まれていく。

あたしは違うかといえば、そうではない。
けれどあたしは、それ以上にあの姉に昔から……もう生まれた時から振り回されているのだ。

沈んでいる暇なく姉は次から次へと悪事に勤しみ、尻拭いに奔走するうち、あつという間に時は過ぎていく。
まさに、開き直りと呼ぶべき克服の仕方だ。

「あんたの生き様は見事だよ、ウィンズ」

「心でも読んだ？」

「読まなくたってわかるのさ」

いいのか悪いのか。

何はともあれ、ビーチェからジタンに贈り物がされる。

この店には珍妙なことから貴重、希少なものであるわけで、これは嬉しい話だ。

「何がいいかな」

「ビーチェ、何かくれるの？」

「らしいよ」

闇に咲き誇るジタンの笑顔に、つられたように、あたし達は笑った。
棚にひしめき合う品々を眺めながら、どれが似合うかを考えつつジ
タンに合わせてみる。

ジタンはジタンで、あれやこれやと気に入ったものを手に取っては
歓声をあげていた。

「そんなにはやれんなあ」

ピーチエの苦笑いに振り向けば。

「ジタン！」

どこの成金かと言わんばかりにじやらじやらと着飾った彼が、得意
満面でそこにいた。

青年だというのに、この無邪気さはどうなんだ。

「いっぱいすきなあったよ」

「もう……ん？」

ジタンがつけたのか、たまたま引っ掛けたのか。

腰についた闇より深い漆黒の石が、何故か、煌めいたように見えた。

手に取って、灯りのもと目を凝らす。

「こんなものまであんの」

「流石の品揃えだろう」

ビーチエの言葉に唸るしかなかった。

ブラックスター
『黒星石』

黒炎を宿すその石は、全てを焼き尽くすと言われる
魔石。

「黒竜が死んだ後、その魂を宿した石だ。竜は気高き生き物、持ち主を選んだようだね」

決まりだ。

気高き魂は、無垢な魂を選んだ。

それに間違いはないと、あたしは断言出来る。

サイズからして魔力増幅器と同じくらいだから、空いている右手にグローブとして嵌めるといいかもしれない。

「本題に入ろうか、ウィンズ」

他の品物を棚に戻して、ビーチエの言葉に頷く。

これからの道標を照らしてくれる時間が来た。
その水晶には、何が映ったのか。

フィルターまで燃え尽きた煙草を灰皿に捻じつけ、小さな椅子に腰掛ける。

興味津々なジタンは、水晶を覗き込んでいた。

「まずはそうさね、黒星石をグローブに取りつける腕のいい職人は、市場の端にいる」

「そこまで見てくれたの」

相当お気に召したらしい。

弧を描く口元は、そうだと言わんばかりだ。

「広場へ抜ける手前だよ。煤けた茶色いテントを張ってる男さ」
「男なんだ」

水晶に映し出された無精髭の男に、ジタンの曇行きが怪しい。
皺くちやの手が、優しく耳を撫でつけた。

「お姫様のためだ、我慢おし」

そんなことまで知ってるわけね。

ちら、とあたしを見やつてから、ジタンは小さく頷いた。
嫌々なのが滲み出ているが、気にしないことにする。

「さてお姫様、」

「それやめてよ」

「白髪しらがの君がいいかい」

「『はくはつ』ね」

気にしているわけじゃない。

ただ、『しらが』は流石に、抵抗がある。

くく、とくぐもった笑い声に、大きく肩を落とした。

「で？」

「ああ。アルジアに戻りターニヤの息子連れて、北の地イシュバ
ジルへお行き」

危険だとわかっている。

けれどあたしも、それしかないと思っていた。

取り敢えず、『氷の魔女』を頼りにするしかないか。

水晶の画像が変わる。

目を細め、砂嵐のように揺れるそれに見入った。

「ドヴェルグ族の生き残りがあるよ」

その言葉に、ジタンと目を合わせた。

何はともあれ行き先は決まった。

後は、あたし達次第といったところか。

ふっと消えた映像を不思議そうに見つめるジタンが、にこっとビーチエに笑顔を向けた。

「ビーチエは何でも見えるの？」

「何でもじゃあない。が、大抵は見えるさ」

ビーチエは大抵を見るが、全てを見通す千里眼を持つわけではない。いくつもある中の道標の一つを示すだけだ。

何故か。

簡単なこと、魔術師のほとんどはあたしを含め、運命を信じていない。

運命とは何か。

過去が決まっているならば、未来も決まっているということだ。定められたものからは逃れられないということ。それすなわち、如何に足掻こうと、未来は変えられないということに他ならない。

そんなもの、信じて堪るか。

あたし達は生きている。

森も動物も泉も木も花も、全てが生きている。

あたし達には意志がある。

自ら選び、思考し行動している。

生まれたなら死ぬ。

それは変えられない自然の理だが、見えない先は自分で選ぶ。
自分で選ぶからこそ、全てには価値がある。

だからこそ、生には意味があり価値があるのだ。

少なくとも、あたしはそう考えている。

ビーチエもまた、似たようなものだろう。

だからあたしはビーチエに結果を聞くことはない。
ビーチエもまた、見えているかもしれないいくつかのそれを口にすることはない。

ジタンもいつか、それを考える日が来るだろうか。

出来るなら、そんな小難しいことを考える必要がなければいいと、
密かに思った。

と、そんな胸中知る由もなく、ジタンは完全に前のめりだ。

「俺とウィンズがずっと一緒にいられるか見て！」

……ずっと？

待て、待て待てずっと何？

ずっとって……ずっと、ジタンはあたしに面倒を見てもらうつもり
ってこと！？

いや。

いやいやいや、待ってジタン。

自活しようよ、自立しようよ、取り敢えずあんた大人でしょうが！
と言っまでもなく。

初めてじゃないかってくらいに、ビーチエは大声で笑った。
少なくとも、あたしが知る限りでは初めてだ。

「心配いらないね」

何が！？

とはやっぱり言っまでもなく。

「ジタンにとってウインズはお姫様だ」
「そう、ウインズはお姫様！」

主様の間違いだ。

「そして、ジタンの世界そのものでもあるね」
「そう、俺の世界！」

意味がわからん。

口を挟むまでもなく進んでいく会話に、ただ、呆気にとられる。
あたしの意志はお構いなしか。
フードの下から覗いた瞳は、今度は、あたしを見つめていた。

「あんたにとって、ジタンは星だよ」

「星？」

「まだわからんだろうさ」

謎の言葉の意味を教える気はないらしく、その瞳はただ、優しく弧を描いていた。

星、ねえ……。

「ウインズの星があ……俺、すごいねー！」

「ああ、すごいかもね……」

絶対に意味わかってない。

はしゃぐジタンから逃れられないとばかりの予言に、諦め半分。

そして何故か、気持ちの隅には暖かさも感じていた。

ヴァーユ

ビーチエの店を出た頃には、すっかり日が落ちていた。もとが暗い店内だったから、そんなに違和感はない。

ジタンの手にある黒星石は、闇にあつてもときどききらりと煌めく。

「初めて見たけど、不思議な石だねえ」

「グローブにくっつけてくれるんでしょ？」

「右手が空いてるからね」

『宵闇の兎』と呼ばれる武器商人なら、果たしていくらの値をつけるだろうか。

彼女はまあ、たくさんのお宝を持っているから、主人を選ぶような気難しい石は欲しがらないかもしれないけれど。

何にしろこれで、ジタンは炎を扱える。

風と炎か。

「上手く連携を取って闘えば、あたしとあんたは、相性いいかもね」

風は炎を煽り、相乗効果が生まれる。

もちろんあたしの風は、炎を遮り鎮火するだけの力もある。

何にも染まらない漆黒は、同じ色を持つジタンによく似合っていた。

「すぐに市場に行く？」

「そうしたいけど」

果たして市場が、ビーチエが言った男が、この時間までやっているかどうか。

「行くだけ行ってみるか」

宿を取るほどの金も時間もない。

金は全て、ターニヤに預けてきていた。

市場までそう遠くない道を今度は、堂々と歩きだした。

夜道は歩いちゃいけません。

遠い昔に、聞いた気がするけれど。

「久しぶりに遭った」

「そうかよ、俺もだぜ」

夜盗に出くわしていた。

今日はジタンに乗ってここまできたわけで、出会う暇さえなかった。前後を取られているとは、つけ狙っていたか。

リーダーらしきガタイのいい兄ちゃん……というには少々年増な男が、汚らしい舌で唇を舐めている。
月明かりできらりとナイフや剣をわざとらしく見せつけ、恐怖心を煽りたいらしい。

が、

「誰？」

隣の無垢な漆黒の瞳は、緊張感の欠片もなかった。

「悪い人」

伸^のすか。

と思ったのも束の間。

「ぎゃあ！」

「うっ！？」

「あうっ！」

隣で風の唸りを感じたと同時に、目の前の三人が瞬殺された。

「う、うつ……」

生きてはいるらしい。

速い。

ひゅう、と風を纏い振り向いたジタンの瞳には、金色の一筋が獣のように浮かびあがっていた。

一瞬にして三人だ。

しかも、得物もなしに体術のみで。

風が、纏わりついている。

ごく自然にジタンを取り巻き、ジタンを受け入れ加勢をしているようにも見えた。

この子もまた、風に愛された者か。

能力自体はなくとも稀に、そういった者は確かにいる。

流石は獣人、人狼族の純血種。

自然は彼らと共にあるのだ。

「てめえらああああ！」

「ウインズ！」

左手を振り払う。

それだけだ。

ひゅっ。

風が鳴く。

路地裏のより後退した遙か先で、背後にいた四人はくたりと伸びた。

「ウインズ……すごい」

「ジタンもね」

相性は、間違いなくよさそうだ。

夜盗を縛り上げ、突き出すつもりで引つ立てる。

所々折れているようだが、自業自得なので仕方ない。

気絶した一人をジタンが担ぎ上げたとき、男の腰巻きから、ぼたぼたと何かが落ちた。

「これ……宝石？」

あたし達より前に、襲われた不運な人がいたらしい。

「あ、もし！それは自分のなんだ！」

市場の方向から掛けられた声に振り向けば、息を切らしながら駆け

てくる男が見えた。
どこか見覚えが……。

「あれ、水晶で見た職人じゃない？」

ジタンの言葉に、ああ、と納得する。

無精髭を蓄えた男は精悍な男前で、外見は三十代半ばといったところだろうか。

夜盗に巻かれたらしく、肩の上下はかなり激しい。

「助かった助かった」と、大事そうに宝石袋を受け取った。

「よかったね、おじさん」

水晶を見たときの嫌々な雰囲気はどこへやら。
ジタンは笑顔でそう言った。

「おじさんて」と突っ込みそうになったのを、取り敢えずぐつと堪える。

見た目的には間違っていない。

「いやあ、本当に助かったよ。商品搔っ払われて追い掛けたんだが、どうにも追いつけなくてなあ」

がははは、と豪快に笑った彼は、今度ははたと、あたしを見た。

「『風の魔女』とお見受けするが？」

「知ってるの？」

「こう暗くちゃ何だ。お礼も兼ねて、うちに来てはどうだ」

願ったり叶ったり。

「ついでに泊まっていけよ」と言われ、今夜の宿は決まった。

「こう見えて俺の本職は武器職人でね」

煎れたてのお茶を出しながらそう言った彼は、エイツ・マッケンロ
ーと名乗った。

「あんたらほどじゃあないが、少しばかり魔力もあってな。婆さん
が魔術師だったってわけだ」

彼が言うには、その婆さんとやらには放浪癖があるらしく、しばらく
く見ていないとのことだった。

まあ、魔術師なら、どこかで元気にやっているかもしれない。

「魔力があるなら、あいつらやっちゃえばよかったのに」

「そうもいかねえんだよ」

ジタンの問い掛けに、エイツはまた豪快に笑った。

「俺の魔力はもっぱら職人用らしくてな。それなりに体術は仕込まれたが、まあ、普通より強えっくらいだ。足の速さも並の人間と変わらねえ。陣も術も使えねえんだよ」

「職人用って？」

ジタンは興味津々だ。

質問は任せて、お茶を啜ることに専念することにした。

「親父が職人でな。俺の魔力は、武器防具に込めることで発揮されるってえわけだ」

部屋中ずらりと並べられた武器防具 さっきから一味違うと思っ
ていたが、原因はそれか。
確かに、腕のいい職人だ。

それにしても、陣を張れないとなると。

「この店の陣は誰が？お婆様？」

話からすれば、エイツではないはずだ。

しかし、確かにここには、強力な陣が張られている。

ああ、とエイツは立ち上がり、四方に灯された灯りの一つを指した。

「陣光石^{マジックストーン}を四方に置いてんだ。お得意様がくれてね」

すん、と鼻を鳴らしたジタンは、曖昧な顔で首を傾げている。
匂いがわからないらしい。

つまり、魔力の気配を消すことが出来る者が作った、高度な陣光石
というわけだ。

それを見ていたエイツは、何故か、得意気に胸を張った。
あんたが作ったわけじゃなかるうに。

「ふっふっふっ……わからんだろう。人狼のあんちゃんだってわか
らんだろうよ」

「ジタンだよ」

「そうかジタンか」

「ジタン・トーチ」

「そうかジタン・トーチか」

放っておいてもいいかな。

気の合うらしい二人は、ふっふっふつと笑い合っている。
ジタンに至っては、何故そうしているのかわからない。

気をよくしたらしいエイツが、大発表とばかりに腕を広げた。

「これを作ったのはな、あの『宵闇の兎』だ！」

「ああ、やっぱり」

し　　ん。

「もつと驚けよ！」

そう言われても。

「だって武器職人なんでしょ？武器商人のあいつと何らかの交流があつても、おかしくないじゃない」

それでいて一流の魔術師といったら、それしかあたしには思いつかない。

相変わらず、古今東西交流の幅が広いことで。

腹が減ったと騒ぎだしたジタンに、エイツが台所へ立つ。

「借りてもいいなら、ジタンに作らせるよ」

「いいのか？悪いな」

「その代わり、お願いがあるの」

ポケットから黒星石を取り出して、エイツにかざして見せた。

「これだけあったら、カツの卵とじ丼と卵スープが作れるねー」
「まあ……そうね」

うきうきと腕まくりをするジタンを台所に残して、作業場へと顔を出した。

「どう？」

「ずいぶんいい品だ。どこで手に入れた？」

すっかりやる気満々なエイツは、灯りにかざして黒星石を眺めている。

「ビーチエっていう占い師の店でね」
「あの婆さんとか。よく買えたな」
「ジタンにくれたの」
「珍しいこともあるもんだ」

魔力ある者の間でビーチエは有名だ。
そしてまた、彼女の人嫌いも有名な話だった。

「お前さん達には助けてもらったしな。三時間もありゃあ、立派な魔具に仕立ててやるぜ」

「頼むわ」

タダと思っていいだろうか。

いざとなったら、足りない分は後日支払いに来ないとならないかも……。

作業は本職に任せて、台所も大丈夫だろう。

手持ちぶさに煙草をくわえ、壁を覆い尽くす見事な魔具達を見て回る。

伝説の品とまではいかずとも見事な出来映えが、エイツの腕が一流であることを物語っていた。

「すごいわね……そりゃあ、あいつも取引したいはずだ」

魔力を込める、というだけあって、それぞれに魔具と言つに劣らない魔力性能が付属されている。

エイツの魔力は、内に込めることに特化しているのだろう。

まさに、職人用だと思った。

「破壊のために使うより、ずっといいね」

例えこれらが、それを目的に作られたとしても、
使い方次第、持ち主次第なのだ。

これは、とある武器商人の言葉だったけれど。

夕食で一旦休憩に入ったエイツは、もう少しだからと作業に戻って
いった。

適当に奥の部屋を使ってくれと言われ、洗い物を済ませてからジタ
ンと共にそこへ向かう。

小綺麗にされたそこには、ダブルベッドがあった。

ダブルは流石にどうだろう。

今までの一ヶ月、同室だったとしてもベッドは別だった。

ジタンはそういった気配さえさせないけれど、そうは言えども青年
だ。

……体だけは。

いや、あたしだって生娘なわけじゃないけれども。

まあ、大丈夫か。

「ウインズ、お風呂は？」

「先に借りてきていいよ」

いってきまーす！と元気に出ていったジタンを見送って、ベッドに
身を投げる。

あれ……？

急激に襲ってきた眠気に、視界は少しずつ、遮られていった。

あたし、こんなに疲れてたっけ……？

一面は緑だった。

空は限りなく白に近い青で、緩やかにまた白が流れゆく。

小鳥の囀り、木々の柔らかな葉擦れ、頬を撫で髪を攫う風は優しく通り過ぎてまたやって来る。

ざあ、と風が鳴いた。

「はじめまして」

「参ったな……」

突如現れた彼女の言葉と、あたしの言葉が重なる。

光を纏う黄金の長い髪、透けるような真っ白い肌。

空の色をした右目と緑の色をした左目は、空と大地を繋ぐ役割であることを指している。

それをあたしは知っていた。

「ふふ、ずいぶんね。わたしはずっと待っていたというのに」

ふわり、と彼女が笑う。
あたしも笑うしかない。

あたし如きでは、手に負えないからだ。

「あなたの名前は？」

「知っているでしょう」

「たぶんね、一応よ」

不躰な物言いにも、彼女は柔らかく笑ったままこう答えた。

「ヴァーユ」

それは、今は失われつつある古代神の一人の名前。
そして『あたし』が『あたし』である限り、何よりも身近であるはずの神　『風神』の名前だった。

「あなたは何と言うの？」

「ウインズ・ゼロムス」

「『風』の名前を持っているのね」

嬉しそうに彼女が笑えば、それに応えて風が凪ぐ。

どうしよう……神様なんて、この上なくこわいんだけど！

そうは思えど完全に意識を引っ張り込まれている今、あたしにどう
こつはまず出来ない。

そう、ここは精神世界だ。

「待ってたって、どういうこと？」

「ああ……あなたのいる今より少し昔の人間がね、わたしの一部を
現世に引っ張り出してしまったの」

すごいことをした奴がいたもんだ。

あたしの苦い顔に気づいたかどうか。

それはわからないが、彼女は話を進めた。

「せっかくだから、そのままにしてあるのだけれど」

風は自由であり、ありのままを受け入れる存在。

すなわちそれは、司る神の気質そのものと言える。

彼女はまさにそれだ。

ほう、と頬に手を当て嘆息する様は、どこか演技じみている。
面白がっているようにも見えるのは、気のせいだと思いたい。

「なかなか『わたし』を扱える者がいなくて、寂しい思いをしていたの」

「まあ、そうでしょうね」

神とはすこぶる我が儘であると、それは遙か昔から語られている。
気難しく、自由奔放。

気に入らなければ容赦なく切り捨て、崇めなければへそを曲げて天罰を下す。

善も悪もなく、それはただ神の意志だ。

神々が見目麗しくあるのは、その方が神自身、都合がいいからに他ならない。

と、どこぞの悪女が語っていた覚えが記憶の片隅にあるが、否定は出来ない気がした。

賛同もしたくないが。

「あなた、使ってくださらない？」

……。

「あたしが？」

「あなたには『わたし』の力があるでしょう？わたしが気に入ったのだもの、きつと『わたし』の一部も扱えるわ」

そもそもヴァーユの言うそれが、どんなものかわからない。
が、断ったら断ったで、未恐ろしい気もする。

悶々としていたなら、また風が鳴いた。

「その家の主に言えばわかるわ。『ヴァーユ』よ」

目の前は、真っ白になった。

重い。

気がついて最初に思ったのは、そんなことだった。

「……………何故に抱きついて？」

すやすやと寝息を立てるジタンの漆黒に縁取られたその目はもちろん伏せられており、長くも青年らしい手足は、がっちりとしたあたしをホールドしている。

ふわふわとした髪の毛が、あたしの鼻を掠めた。

あ、柔らかい。

何ていい毛並み……

「ぶえつくし！」
「ウインズ！」

それは素晴らしい寝起きで飛び起きたジタンが、覆いかぶさるように、今度は前からあたしをホールドした。

「よかった！よかったあああ！ウインズ、全然起きなくてね！俺、心配で寝れなかった！」
「寝てたよ」
「寝れなかった！」
「そうか」

まあいい。

うるうるの瞳には、どうせ適わないのだ。

「わかったから離して」
「離さない！」
「何で」
「心配した！」

それは本当らしい。
巻きついた腕は、小さく震えていた。

宥めるように撫でてやれば、落ち着いてきたのか、少しだけ力が和らいでいく。

人狼というより、子犬みたいだ。

「……心配、した」

「そうか」

「本当に心配したんだ」

「うん、ごめんね」

「神様に呼ばれてました」何て、言える雰囲気でなく。

窓からは朝日が射している。

ずいぶんと気を失っていたわけで、やっぱり、彼としては不安だったのかもしれない。

「置いていかないで」

小さく、耳元で呟かれたその真意を知る由はないけれど。

より引つつき虫と化したジタンを引きずるように台所へ行けば、輝かんばかりの笑顔でエイツが迎えてくれた。

「よう、コーヒー飲むか!？」

「元気だね」

「徹夜明けだ!」

ありがたくちょうだいして、煙草をくわえ椅子に座る。
エイツもまた煙草をくわえて、あたしの灯した火で先に白煙をあげた。

「渾身の出来だ」

渡されたグローブはジタンに渡したものと同じ焦げ茶色をしていて、中央には黒星石が鎮座している。
やはり左のグローブと同じく指先は出るデザインで、薬指の部分には、小さな漆黒の石がついていた。

「これは？」

「ジタンは人狼なんだろ？お似合いだと思ってな。安心しろ、全てサービス、お礼だから受け取ってくれ」

徹夜明けとは思えない晴れ晴れとした笑顔で、エイツはそう言う。
本当にタダでいいらしいから、お人好しもいいところだ。

「ありがたいけど、大丈夫なの？」

「あの武器商人と取引してんだ、充分稼がせてもらってるさ」
「確かにね」

嬉しそうにグローブを眺めるジタンにそれを渡せば、すぐに嵌めて見せてくれた。

「すごい、手に馴染む」

「そうだろうそうだろう」

革だけでも上等な品だ。

後は、黒星石をジタンがどれだけ扱えるか。

それは、あたしが修行してやれば、早い段階でものに出来るだろう。

扱える……ああ。

「『ヴァーユ』って、わかる？」

すっかり忘れていた重要単語に、エイツもまた「ああ！」と思いついたように手を打った。

「忘れてた忘れてた！」

どたどたと忙しく作業場に引っ込んだかと思えば、両手に乗る程度の箱を持って帰ってくる。

ずいぶんと仰々しい鍵を開けたなら、見事な細工の真っ白な短銃が姿を現した。

「前に『宵闇の兎』が来たとき、これをお前さんにつて言付かってたんだ。ほら、あの人銃マニアだろ？どっかで手に入れたらしくてな」

ひどいノーコンだけどね。
とは言わず。

「何か扱えなかったつて言つてたなあ。まあ『ヴァーユ』　『風神』の名を冠するくらい銃だ、人を選んでも不思議じゃない」

昨日今日と、よくよく人を選ぶものと縁があるらしい。

「とはいえ、流石は名の知れた武器商人だ。こんな伝説級の魔具、お目に掛かるうつつたつて、なかなかそうはいかないぜ」
「確かにね……細工も見事だよ」

真っ白な本体は大理石だろうが、風の魔力が働いて驚くほど軽い。持ち手に彫り込まれた女神は、夢で見たヴァーユとよく似ている。瞳に嵌め込まれたアカアマリンとメノウが、魅惑的にきらめき、縁取りの金色が上品さを醸し出していた。

「何らかの力が働いてるのか、傷一つつかないんだよ」

ヴァーユの一部を封じ込めたくらいだから、最もな話だ。

「きれーい」

「そう言ってもらえれば、ヴァーユも喜ぶだろうよ」

エイツの話によれば、銃にも関わらず、弾はいらないらしい。
込める場所はあるが、扱える者にとって、それは飾りではないと
のこと。

「あんたの力が弾になるのさ、『風の魔女』」

なるほど流石は『風神』の銃だと思った。

理由と気持ち

エイツに礼を述べ、早々にアルジアへと向かい、ターニヤの飯屋に到着したのはその日の夕方。

これから北のイシュバジルへ向かうには、イリツシュもいるため、もちろん徒歩となる。

よって、旅支度を整えるためにも一泊必要だった。

そして彼は、いつになく不機嫌甚だしかったのだ。

「ジタン、どうした？」

一日ぶりのシャンプーの匂いを振り撒いて、がしがしと頭を拭きながら、ぶすけるジタンに問い掛けた。

「……」

「主様を無視すんのか」

「……しない、けど」

けど、何だ。

ベッドの上で膝を抱えて、ちら、と向けられた視線はすぐ逸らされる。

言いたいけれど言えない。

そんな雰囲気は滲み出ていた。

「何、怒らないから言ってみな」

隣に腰掛けたなら、ぎし、とベッドが鈍く軋む。

びく、と肩が揺れて、「うー」と小さく唸ると、また沈黙を守ってしまった。

「お腹でも壊した？」

「……違う」

「疲れちゃった？」

「……違う」

「どうしたか言ってくれないと、あたしにはわからないよ」

ようやく交わった漆黒は、ただただ、不安に揺れていた。

「俺、ウィンズがすきなんだ」

「……知ってるけど」

何を今更。

あれだけ大々的に愛情表現されれば、いくらあたしが鈍かろうがわかる。

が、返答が気に入らなかったのか、ぎゅ、と眉根に皺が刻まれた。

「違う、だいすきなの」
「うん、知ってるよ」

あたしはこの時、『だい』の部分が伝わらなかったことが気に入らなかつたんだろうと。
そう思っていた。
そうだと疑わなかった。

天地がひっくり返るまでは。

「……」
「……」

まさに。

まさに今、天地がひっくり返った。
あまりに驚きすぎて、声も出ない。

ジタンは覆いかぶさったまま、ひたすらにあたしを見つめていた。
その漆黒の瞳で。

「違う……違うんだ、ウインズ」

ああ、また泣きそうになって。
あたしはその瞳に弱いんだって、知っているはずなのに卑怯だ。

その毛並みのいい髪を、耳を、撫でてあげたいのに、体は力が抜けてしまっている。

真っ直ぐな視線に射抜かれて、まるで、ピンに刺さった蝶みたいだ。

「違う……違うないけど、何か違う。上手く言えないけど……」

必死に絞り出したらしい言葉は、語尾が震えている。

つぐんでは開き、またつぐんでは開き。

自分でも上手く言葉にならないらしく、眉根の皺が深くなっていくのが見えた。

「俺……俺、記憶も、なくて……言葉もあんまり、知らなくて……」
「……うん」

ようやく、それだけが口から零れる。

「知ら、なくて……でも、」
「……うん」

心が痛い。

ひたすらに言葉を探すジタンに、そんなことを感じた。

ひたすらに言葉を探して、ひたすらに伝えようとするジタンに。

「でも、でも……でも、ウィンズが、すき、なの……」

息が、止まった。

あたしはばかだ。

あたしは、ジタンの気持ちをわかっていなかった。
主になったのは成り行き　本当に？

運命なんて信じてない。

そんなものはこの世にない。

それでも、震えるこの子を抱きしめたいと思う気持ちは何だろう。
親心とは違うようなこの気持ちは……何だろう。

嘘じゃない。

ジタンの瞳がそう言っている。

だいすき。

ジタンの瞳がそう言っている。

だいすき。

だいすき。

傍にいて。

傍にいたい。

離さないで。

離れたくない。

愛して。

記憶がないが故に、何もわからないが故に、信頼する者があたししかないが故に。

だからあたしが『主様』。

だからあたしが……『お姫様』。

散らばったあたしの白をジタンの手が優しく掬う。

ただただ、慈しむように。

その手があたしの唇をなぞる。

ゆつくりと、震えながら。

「……だいすき、ウインズ」

ゆつくりと降りてきた端正なその顔は、確かに、青年の表情をしていた。

一瞬、全てはあたしの勘違いかもしれないと思った。

ジタンはまだ、無垢なのだから。

親しい者があたしだけだから、主があたしだから、感情がごちゃ混ぜになっているのかもしれないと。

それでも。

「……ん」

降ってきた柔らかな感触を何故か、拒めないあたしがいた。

どうしてなんて、わからない。

触れて、啄んで、恐る恐る侵入してきた温かな舌を絡める。

「ふ、あ……んっ」

自分のではないような甘ったるい声と、それを追うように水音が鼓膜を打つ。

大きな手で耳を塞がれて、それらは、体の中で甘やかに響いた。

こんな口づけは初めてだ。

求められ、慈しまれ、存在を確かめられているような口づけ。

要領を得たらしいジタンの舌が、優しく歯裏をなぞる。

思わず反った背筋が、ぞくりと震えた。

その隙間にするりと手を差し入れられ、上手く力が入らない。

支えられた体は不安定で、揺れるような感覚に陥った。

「……は、ジ、タン……」
「ウインズ……」

離れた唇を細い銀糸が繋ぎ、ジタンの舌がそれを舐め取ったのが視

界の端を擦った。

一瞬、後悔を滲ませた顔が、あたしの胸元に沈む。

「ごめ、なさ……ごめんなさい……やだ、嫌いにならないで、ならないで……ウィンズ……」

小さくため息が漏れた。

あたしこそ、とは言えなかった。

ならないよ。

聞こえたかはわからない。

どちらでもよかった。

その体を抱きしめたなら、腰に回されたその手に、ぎゅう、と力が籠もるのを感じた。

流されたのか。

それはわからない。

流されたのかどうかさえ、あたしにはわからなかった。

ただ、応えたい。

そう思ったあの瞬間は、きっと真実。

「大切だよ」

少なくとも、出会った時よりはずっとずっと。
ジタンという時間は、確かに、過去のそれよりずっとずっときらめいている。

ジタンの気持ちはやっぱり、あたしからしたら勘違いかもしれない。
あたしの気持ちはまだ、曖昧にしかかたちをなしてはいないけれど。
その両腕に力を込めて、ただ今は、この子を離さないように。

翌朝、六時。

「……ウインズ？」
「うーん……」

もそもそと寝返りを打つ。
まだ早朝なのに何……誰？

「ウインズ」
「!？」

飛び起きた。
するり、空しく上掛けが滑り落ちる。

「……」
「……」

ドアの先には、目を見開いたターニャ。
しっかりと目が合った。

「……胸、まる見え」
「……はい」

飛び起きたせいで上掛けがずれて、ジタンの上半身もまる見えだ。
ターニャの視線は、それは素早く全てを確認した。

「一言だけいい？」
「……どうぞ」

気まずい空気が部屋中に漂って、知らず目が泳ぐ。

「イリッシュのことが済むまで、避妊はしてよね」
「……はい」

って言うしかなかった。

ようやく上掛けを胸元まで引き上げて、肩を落としたのは言うまで

もない。

不穏な噂

飯屋の前に、あたし達四人はいた。

まだ早い朝の空気が、ひやりと頬を撫でていく。

ターニヤは心配そうにイリツシュの手を取った。

「くれぐれも気をつけて」

「うん」

「『氷の魔女』にも、くれぐれもよろしくって、鷹を飛ばしておいたから」

「あ、ああ……うん、あ、ありがとう母さん」

イリツシュの笑顔が引きつった気がしたが。

ダーインスレイヴを背負い直して、イリツシュは力強く言った。

「必ず、元に戻ってくるよ」

『すぐに』とは言わなかった。

ターニヤもまた、頷いただけ。

「そろそろ」

「ええ」

声を掛ければ、名残惜しげにイリツシュから離れていくターニヤ。その目が潤んでいたけれど、見なかったことにする。

旦那に先立たれ、魔力を持ち生まれたはずの息子からそれが失われたという現実。

不安にならないはずがなかった。

ターニヤの目があたしを映す。

「頼んだわ」

一つ頷きを返し、朝靄あさぎやの中を挑むように見上げた。

「イシュバジルって遠いの？」

人型のまま隣を歩くジタンは、昨夜のことを気にしないように決めたらしい。

至って大人の心掛けだ。

「まあ、近くはないかな」

アルジア国の北に位置する最北の地イシュバジル国。

その面積は広大で、国内でも地域によって気候の違いが出るほどだ。

ピグス国とを隔てる深雪のイシュタリー山脈を北東に持ち、山脈境界には北に先鋭部隊常駐のイシュタリー北壁、東にニヌルタの森を有する。

覚える気満々らしいジタンは、あたしの説明に熱心に耳を傾けていた。

ターニヤの飯屋があつたのはアギズ森林に隣接するアルジア国南部であつたから、まずはアルジア国そのものを通過しなければならぬ。

ジタンに乗るわけにもいかないので、結構な長旅だ。

「アルジア自体はそう大きな国じゃないけどね。イシュバジルはアルジアの三倍はあるから、あいつのどこに行くまでは、なかなか骨が折れるよ」

「『氷の魔女』のどこ？」

「そう」

北の地と言っても、雪に見舞われるのはイシュバジル北東のみだ。

『氷の魔女』はイシュタリー北壁とニヌルタの森の境、ミュートの街にいた。

ここで一旦区切ったなら、イリツシュが残念そうに笑った。

「これが師匠の知り合いじゃない人の口から語られたなら、師匠も大喜びなんだけどね」

「『伝説』にでもならない限りは無理だね」

二つ名を有する者は多い。

が、実際に少ないといえど、魔力を持つ者自体は世界に三割はいるといわれ、そんな中で、一般的にも語り草になるような魔術師は少ないのだ。

魔術師は永きを生きる故、達観するか絶望するかで両極端だ。

そんなこともあって、子孫を残す者は少なく、長寿にも関わらず総人口数は変わることがない。

「増えないし減らないんだ？」

「今のところはね」

ジタンの問い掛けに肩を竦めた。

空が白む頃を過ぎ、陽の光はだんだんと黄色みを帯びてきていた。

「今日も晴れるね」

見上げたジタンに続き、空を仰ぐ。

あたし達の未来も、これくらいに晴れ晴れとしていたならいいけれど。

後に顔を合わせるだろう『師匠』を思い浮かべ、どうか穏便に、と

小さく手を合わせた。

一日、二日、三日と何もなく、旅は順調に見えた。

四日目の夕方。

「イシュバジルの總統が変わるらしいよ」

屋台で唐揚げを買えば、世間話に混じってそんな言葉をおやつさんから聞いた。

「変わる？」

眉をひそめて聞き返せば、同じくそれらしい顔をしておやつさんが身を乗り出す。

「ああ、結構出来た人だったらいいじゃねえか。残念だねえ」

軍事国總統でそう言われるとは、それなりに善政を敷いていたのかもしれない。

イリツシュに至っては、唇を噛み締めていた。

「おやつさん、よく知ってるね。他に何か面白い話ないの？」

気をよくしたおやつさんは、より身を乗り出してあたしに耳打ちした。

「どうやら、噂によるとな……」

たんまりと唐揚げを購入し、宿屋の一室にあたし達はいた。

「暗殺らしい、ってか」

「それが本当なら、国の一大事だ。早く師匠のところに行かないと」
「まあねえ……」

イシユバジル総統が暗殺された。

噂が本当なら、それは近隣国家にとっても一大事となる。

イシユバジルは軍事国であり、近隣最強国。

次の総統が出来た者とは限らないし、暗殺となれば間違いなく火の粉は飛んでくるものだ。

正直言つて、それは大した問題じゃない。

永きを生きていれば、国の滅亡や戦争など一時のように思える。
有はいつか無に還る。

それは自然の理であり、何人たりとも覆せない掟でもあるのだから。
が、しかし。

そうは思わないのが人であり、疑わしきは罰せよ精神は疑惑の中で
膨らんでいくだろう。

「例えば、」

飽くまでも仮設だけど、と加えて、二人を見た。

「例えば、総統が暗殺だとして。誰がしたかは知らないけど、よからぬ何者かが手を下したとしてよ。手を下した奴は間違いなく下っ端だろうから、親玉がいるわけだよね」

「親玉……もしかして、」

「そいつが、次の総統になるかもってこと？」

ジタンの言葉に頷く。

「そしてまた例えば、そいつはもちろん暗殺者を探すよね。自分が犯人とは言わない」

「どうやってそんな……」

「上層部なら真実は関係ないでしょ。どうせ皆、足の引っ張りあいなんだから」

イリツシュの息を飲む音が、ごく、と部屋に響いた。

「まあ、これは国内で済ませようとしたならの話。でも今のところ、
」
「戦争の準備をしてるとは聞かないな」

後三日もすれば国境だというのに、物騒な噂は総統暗殺だけだ。
あのおやっさんが知らないだけかもしれないが、大通りで出店して
いてそれは考えにくい。
アルジア国内がざわついている気配もない。

さっきの仮説は、悪くないと思う。

「ちょっと単純過ぎじゃない？」

いまいち納得いかないのか、そう言ってジタンは首を捻った。
それを笑い飛ばす。

「人間なんて、結局は単純なんだよ」

そう、残念なことに。
あのとんでもない悪女だって、あたしに嫌がらせをしたいだけで国
を滅ぼしたりしたのだから。

ん？

「何か……」

「ウインズ？」

「……ううん、何でも」

まさか、とばかりに笑って見せた。

風呂の順番を決めて、イリッシュから順に風呂場を使うことになった。

窓際に腰を下ろし、風が運ぶ音に耳をすます。

くわえた煙草には、ジタンが得意げに火を着けてくれた。

「だいぶ黒星石に慣れてきたね」

道中少しずつ力加減を調整しながら訓練してきたが、驚くほど飲み込みが早い。

黒星石に選ばれただけあって、相性がいいのだろう。

ただ、

「水系に弱いんだよねえ……」

ジタンはどうかんばっても、水系魔術は上達しなかった。

しゅん、とへたれた耳に笑えば、「だって苦手なんだもん」と小さく呟いた。

真夜中。

こそ、と動いた気配に目を覚ます。

ジタン……ではない、イリツシュでも。

風が僅かに、不穏な空気を漂わせていた。

隣のベッドの中から、漆黒が闇を見つめているのがわかる。

ジタンは夜目が利くのだろう、ドア付近を睨んでいるようだった。

誰かが侵入してきたのか。

左隣のイリツシュも気づいたらしく、息を潜めているのがわかった。

狙いは……。

「仕留めたり！」

ざしゅ！という物騒な音より早く、あたし達三人はベッドから飛び出した。

「勘弁してよ」

そこには、どこぞの覆面三人がそれぞれのベッドに三本の剣を突き刺さしている光景。

素早く戦闘態勢に入ったジタンとイリツシュは、律儀に、あたしの合図を待っている。

リーダーはあたしということらしい。

物騒なことをしでかした割りに、相手は交渉という手段に出た。

「『ダインスレイヴ』を渡せ」

「持っていないわ」

「は!？」

あっさりと返せば、あからさまに一人がたじろいだ。

「頭、持ってないって」

「んなわけねえだろ！」

そうでしょうね。

一喝された下っ端Aは、「だ、騙すんじゃないよ!」とか何とかかんとか。

「おとなしく渡せば、命だけは助けてやる」

過去、これを信じたばかりがいたんだろうか。
暴拳をなした後で、流石に耳を疑う。

「ウインズ、どうするの？」
「捕まえるか？」

二人の言葉に、さて、と悩んだ。
早くも痺れを切らした輩は、剣を振り回して向かってくる。
ひよいひよいとそれを避けながら、うーん、と考えはまとまらない。

「殴っちゃだめー？」
「うーん……」
「捕まえよう！」
「うーん……」

どうも歯切れが悪い。

「狙いはわかったんだけどねえ」
「どこ見てやがる！」
「あのさ、」
「何だ！ちくしょう、こいつら擦りもしねえ！」

いちいち答えてくれる頭は、完全に気が逸れていた。

だん！

素早く背後に回り、剣を持つ右手を足蹴にする。
左手を後ろに捻じ上げれば、低く呻き声をあげた。

「どうしてあたし達が『ダーインスレイヴ』を持ってると思ったの？」

残る二人も取り押さえられて、またもや、頭は唸るしかなかった。
頭は唸ったまま黙り込み、もちろん、頭が喋らないので下っ端二人も喋らない。

「どうする？」

眉をひそめたイリツシュが、三人をぐるぐると縄で巻きながら言った。

ジタンに至っては、覆面を取り払って顔に落書きをし出している。

「おい、こいつをやめさせろ！」

「お前、髭とか書くんじゃないよ！」

「いいじゃねえか、エロ男爵みてえだぜお前」

「エロ男爵で嬉しいわけねえだろ！」

各自づるさく喚いていたが、ひと睨みしたなら静かになった。

「あの姉ちゃん、こええな」

「こええよ、頭をやりやがったんだぜ」

工口男爵と下っ端Bが何か言ったけれど、聞こえない振りをする。頭の前に座って目を合わせようとしたりしたらそっぽを向かれたので、無理矢理こっちを向かせたら、ぐき、と嫌な音がした。

「痛えよ！」

「気にしないで」

「気にするだろ！」

「いいから」

きゃんきゃんとつるさいな。

「ね、誰から聞いたの？」

「……」

言わないらしい。

「てことは、指図されたわけね」

自分達だけで動いたなら、そう言うはずだ。
少なくとも、盗賊の類いはそれなりのプライドがある輩が多い。
何とも言わないところを見ると、雇われ者だと思われる。

「……いいわ。ジタン、イリツシュ、放り出しとして」
「何で……!!」
「いいから」

イリツシュに耳打ちをして、すぐさま、三人を窓から放り出した。
どすん！と鈍い音がして、がさがさと植木から這いずる三人が窓から見える。

「頭、どうするんで!？」
「どうするって、どうもこうもねえよ!」
「逃げるんすね!」
「あいつらに貸しはねえ、『ダーインスレイヴ』はなかったんだからな!」

まあ、手に入れていないのだからその会話に嘘はない。

切り込みを入れておいてやった縄を解いて、すたこらと三人は逃げていった。

「あいつらって、俺達のことじゃないな」

「みたいね」

イリツシュは闇を見つめたまま、顎に手を当てる。

「手に入れられればラッキー。それくらいの気持ちであいつらを超越したってとこかな」

「誰かが？」

「そ、知っている誰かが」

または、それを『知った』誰かが。

それにしたってタイミングがよすぎる。

イリツシュが『ダーインスレイヴ』を持って帰郷したのが最近。イシュバジル総統が暗殺されたらしいのも最近。

そして、何者かが『ダーインスレイヴ』を狙っている。

風が耳元で凧いだ。

どうやらあの夜盗達は、本当に雇い主のもとには帰らなかったらしい。

誰とも会話さえしていない。

何はともあれ、ここは割れてしまった。

「行くわよ」

早々に準備をして、宿屋を後にする。

イリッシュ云々とか、話はそれだけではなくっていた。

どうしてこんな面倒なことになったんだ。

イシュバジル国

「す、すごいねー……」

最北の地イシュバジル国境南壁。

それを前に、ジタンは開いた口が塞がらないようだった。

「ここはね、入国が厳しいので有名なんだよ」

「これが国境なの？」

延々続いているような国境壁に、ジタンはひたすら、感動している。
さてどうしようかとぼんやり眺めていれば、幾人かの国境兵が足早にやって来た。

「恐れ入ります。『風の魔女』とお見受けしますが」
「……そうだけど」

嘘を吐いても仕方ない。

あたしの風貌は自分で言うのも何だが、なかなか目立つ。
白髪に褐色肌なんて、いないと言い切れないが、そうそういるわけでもない。

それに加えて魔力増幅石付きグローブに「如何にも魔術師です」的

出で立ちでいれば、多少魔術を嚙った者ならすぐわかるものだ。

「明らかにあやしいけど……痛っ」

警戒心を顕わにしたジタンをげんこつで黙らせて、にっこりと国境兵に微笑んだ。

「入国出来る？」

「もちろんです」

すぐさま手続きに走っていった国境兵の一人が、お偉いさんに何か言っている。

そしてあたしは、見逃さなかった。

「お待ちしていましたよ」

彼らの一人が、そう口を動かしたことを。

かたかたと音を立てる木造の車輪に揺られながら、あたし達はミューートの街へと向かっていた。

「姉ちゃんら、魔術師なんかい？」

「そうよー」

気のいい行商のおっちゃんは、へらへらと笑いながら話し掛けてくる。

荷台には大量の衣服が積まれていて、これからミユートの街に行くそうなので、ついでに乗せていただいたわけだ。

「じゃあ何か、あれに参加しに来たのかい？」

「あれ？」

おっちゃんから買ったぬくぬくのコートに身を包みながら、ジタンが首を傾げた。

「何やほれ、最近、イシユバジル總統がお亡くなりになっただけでねえか。それでよ、今国で、魔術師を大募集中らしいでな」

「魔術師を？」

初耳情報に、イリツシュが身を乗り出す。

「詳しくご存知ですか？」

「いやあ、俺もなあ、最近この国に行商に来たばかりだからなあ……噂でしか聞いたことあねえんだが」

それでもおっちゃんが話してくれたところによると、イシユバジル

各地でその話題は持ちきりらしい。

何でも、大層な金額で雇ってくれるらしく、大勢の魔術師達が軍本部へ向かったとか。

「でな、魔力試験みたいのがあるらしい」

「つまり、魔力レベルを測っているわけね」

「てことだろうなあ。自称魔術師なんかは、落ちたりもしたらしいけど」

「ま、国がやるくらいだから、なかなか採用ってわけにはいかねえわな」と続けて、おっちゃんはからからと笑った。

「ウィンズが通れたのも、そのせいかなあ？」

ジタンは国境でのが気になっているらしい。

さあね、とだけ答えて、煙草から立ち上る白煙を眺めていた。

まる一日馬車に揺られて、ミュートの街に到着したのはすっかり日が暮れてからだった。

「俺の知り合いんとこに泊まったっていんだよ」

おっちゃんはその言うてくれたが、タダで乗せてきてもらった上にそうもいかない。

お礼と言っわけじゃないがゴーグルを人数分買って、お礼を言って別れた。

「ここがミュートの街か……ビーチエのいたラグト国とは違うね」
「あそこは荒野と砂漠に囲まれた国だからね」

国境南壁から二つほど街を行ったここは、深々と雪が降り積もる静かな街、ミュート。
北東に広大なイシュタリー山脈を遮るイシュタリー北壁を持ち、南には二ヌルタの森を抱える小さくも栄えた境街だ。

あの騒がしい魔女がよくこの街にいるなと……。

ドカ ン！

「……つくづく思ってたんだけど、本当よく追いつかないよね」
「師匠！」

爆音がした先には煙がもうもうとしており、雪と相まって辺りは真っ白だ。
イリツシュが駆けて行った先には、見覚えのある家の一部が半壊していた。

「げっほ、げっほ、まーた失敗しちゃ……あれ、イリツシュ!？」

這いずるように出てきた茶髪紫瞳の彼女は、真っ白なままに驚いて目を見張る。

「と、えっ！？ウインズじゃない！」

彼女こそイリツシュの師匠であり『氷の魔女』と呼ばれる旧友イメルダ・トーヤその人だった。

「やだもーイリツシュだけかと思ってた！」

そういえばターニヤが鷹を飛ばしてたっけな、とぼんやり思い出す。

「ウインズ来てくれて助かったわー！」

「そりゃそうでしょうね」

半壊した壁をこんな時間に直してくれる業者がいるわけもなく、風の結界で応急措置をしたのはあたしだ。
外からまる見えだとイメルダが騒ぐので、見えないようにもしてやった。

ていうか、お前がやれ。

とも思ったが、しばらく泊めてもらうつもりなので、これは厚意と

いうやつだ。

いそいそと湯気立つ紅茶を出しながら、腰掛けたイメルダがそれを啜る。

「で、何しに来たのよ？」

ぽかーん、としたあたし達に、「ちよつと？」とイメルダは首を傾げた。

「ターニヤから鷹来たんだよね？」

「来たけど」

「何て？」

えー？と思い出すイメルダが、ああ！と手を打つ。

「イリッシュ、豚足食べれないんだって！？しっかりしなさいよー
もー！」

「……」

「……」

「豚足って何ー？」

ターニヤは何を送ってんだ。

豚足の説明をするイメルダとそれを聞くジタンは、どうやら気が合
うらしい。

「ジタンっていうの！あたしはイメルダ・トーヤ！有名な『氷の魔
女』よ！」

「イメルダが『氷の魔女』なんだ！。ウィンズと友達なの？」

「何て言うか、弟子みたいなー！？」

しばらく放っておくことにした。

深々と、雪は積もる。

この静けさに反して、何かが起きているのは確かだった。

イメルダがいつまでもジタンから離れないので、ジタンとイリッシ
ユに夕飯を作らせることにした。

キッチンで忙しなく働く二人を横目に、ようやく本題に入る。

「イリッシユの魔力をもとに戻すつもりで来たの」

一瞬、目の前の顔が曇った。

「『ダインスレイヴ』ね……どこまで聞いたの？」

基本的に声のでかいイメルダが普通のトーンだということは、彼女

にも思うところがあるらしい。

「あんたじゃ破壊出来なくて、イリツシュの魔力が吸収されたってとこまでかな。持ってきたのは前イシュバジル総統」

「物も見た？」

「あんたの術が鞘と剣に上掛けされてるね」

些細な口論をしつつも共同作業をするイリツシュを一瞥して、イメルダは溜め息をついた。

「悪いことをしたと思ってるの。でも、あたしにはあれが限界だった」

イメルダは攻撃的で高圧的だが、ばか正直で情に厚いことを知っている。

イリツシュのことも、弟子として可愛がっていたのだろう。

現に、イリツシュもイメルダを師匠として慕っていた。

「ウインズの力で、どうにか出来ないかしら」

その言葉に首を振った。

「無理だね。風は岩をも穿^{うが}つけど、『ダーインスレイヴ』には特殊

な術が施されてる。新たに風で書き換えることは出来ない」
「そうよね……」

頭を垂れて、その目は小さく揺らめく紅茶を見つめていた。
イメルダには悪いが、協力してもらわねばならない。

「ここに来る途中、アルジアの国境付近の街で襲われたんだよね。
『ダインスレイヴ』を狙ってたらしいけど」

「えー!？」

「雑魚だったから平気。ただ、何か思い当たることない？」

あたしはどうも引っ掛かる。

イメルダは黙ったまま、目を泳がせていた。

彼女はいわゆる『裏』と呼ばれる稼業をも請け負う魔術師であり、
裏には当然、公に出来ない物事が絡んでくるので守秘義務があるの
だ。

「あんたの立場もわかるけど、いろいろ気になる噂も聞いてね。例
えば……『総統暗殺』、とか」

びた、とその視線が止まったのを見逃さなかった。

おずおずとこちらに向けられる視線を絡め取る。
ようやく、その口が開かれた。

「……それを持ってきたとき、総統は言ったの。『狙われているから』って」

イメルダは続ける。

「誰にとは言わなかった、巻き込みたくはないと言ってたわ。隠密に持ってきたものだから、早々に破壊して欲しいって。でも怖くてなかなか実行出来なかった」

「隠密に持ってきたはずが、どうして漏れたのか……いや、」

そこで区切って、目を合わせる。

「ばれたから、殺された？」

イメルダのことだ、破壊時にはもちろん魔力が漏れないように魔法陣を張ったはず。

だが、ことは露見したのだ。

「代わりは渡したのよ！わざわざドヴェルグ族と交渉してまで、手に入れたんだから！相当な目利きでも、偽物とは……！」

「ドヴェルグ族？イシュバジル軍に殲滅されたって」

その昔、イシュタリー山脈を棲み処としていた闇の妖精ドヴェルグ族。

イシュバジル国家建設時、脅威になり得るとの理由だけで、一方的に戦を仕掛けられ殲滅したとされる妖精一族だ。

あ、とイメルダはそれだけを漏らした。

どうやらそれもまた、守秘義務に入る内容らしい。

「見つけたわけか」

完全に肩を落としたイメルダは、大きく溜め息をついてから笑った。

「どうも『裏』は性に合わないのよね」

「だろうね」

それでも請け負うのは『伝説』と張りたいただけか、はたまた、ただのお人好しか。

ちなみにあたしは、ほとんど裏稼業はやらない。

血生臭いことは好きじゃないからだ。

それより優先すべき事柄があるから、とも言えるけれど。

「探し出したのはあたしよ、イリツシュは知らない。代わりを見たときなんか『こんな代物を持つてるなんて、流石師匠ですね!』って言ってたくらいよ」

イリツシュはいつも、ターニャよりイメルダに影響を受けているらしい。

イメルダが言うには、ドヴェルグ族の生き残りはイシュタリー山脈にあるというある洞窟の入り口を守護し続けているとのこと。
見つけるのに大層苦勞したらしく、代わりの代物にも大枚をはいたと苦笑した。

「もう行かないって約束したのよ」

「そうもいかないんだよね」

「そ、そうだけど……！」

そこでジタンとイリツシュが、いい匂いと共に夕飯を運んできた。
どうやら今夜は、卵料理ではないらしい。

「弟子が可愛いでしょうが」

「俺がどうかしました？」

イリツシュに尋ねられ、イメルダは苦虫を噛み潰したような顔をした。

「そんなことが……」

エビフライの手を止め、イリッシュは下を向いた。
自分のために黙っていてくれた師匠に、申し訳ないといったところか。

「もういいのよ。どうせウィンズに黙ってるわけにもいかなかったし……あんたがターニャのところにいったってことくらい、わかってたわ」

てことはだ。

つまり、危機を察してイリッシュをここから逃がした、というわけではないらしい。

「総統が死んだのはいつ？」

「一週間経ってないくらいよ」

イリッシュが帰宅したのと、ほぼ同じくらいか。

「ところでさ、イメルダ、家に強盗とか入らなかった？」

「ああ！」

さっと向けられたフォークに、ジタンがびく、と肩を揺らした。

「あつたあつた！ちよつと前……一週間くらいかな？うつかり結果張り忘れて買い物行っちゃってー！でも、何も盗られてなかったのよ。間抜けよねえ」

間抜けはあんただ。

イリツシュでさえ、額に手を当ててうなだれている。

「それきつと、目的は『ダーインスレイヴ』ですよ、師匠」

「えっ！？マジで!？」

「たぶんマジです」

さーっと青ざめたイメルダに、ジタンでさえ、やれやれとばかりに呆れた笑みを浮かべた。

「じ、じゃあ、もしかして……」

まだ何かあるのか。

「四日くらい前なんだけど、軍の兵士に『最近お弟子さん見ないですネ』って言われたのも……」

「何て答えた」

「ちよつと帰郷してますって……見ない顔だったんだけど、よく知ってるなって……」

あんた、本気で裏はやめた方がいいよ。

全て平らげてなお足りないらしいジタンにエビフライを一つ譲って、話を戻す。

「イシユバジルが魔術師を集めてるってのは？」

「うーん……急なのよね。総統も決まってるのに、おかしいとは思っただけど」

「決まってるのか。候補は？」

イリツシュが紙とペンを用意し、イメルダがそれに書き込んでいった。

「候補は三人いるわ、皆会ったことがあるから知ってるの。まずはジェンズ・アンフィ將軍。傲慢で攻撃的、かなりの直情型ね。ドヴエルグ族殲滅を指揮したのは彼の一族よ」

「そんな人総統になったら、ドヴエルグ族が怒るんじゃない？」

「でしようね」

ジタンの意見にイメルダが頷く。

「次はマリスカ・パティーン軍事文官長。議会で発言力があるらしいけど、どうもずる賢い感じがするわね。あたしは嫌い」

老いた狐顔だと、付け加えて笑った。

「最後はワイント・ハルディック將軍。彼は有望株よ。前總統の右腕で民衆の指示も厚い穩健派ね」

「その人になるんじゃないの？」

今の話で考えたなら、ジタンの言うことは最もだ。
ここ二十年ばかり大規模な戦争はない。

民衆は、国土拡大より毎日の生活が大切なのだ。

「と、思うじゃない？ところが、魔術師召集の触れを出したのはアンフィ將軍なのよ」

なるほど。

「議會は？」

パーティーに発言力があるなら、足を引っ張るのが普通だ。

「どうやら、パーティーの賛成で形勢は逆転したらしいわ。だからやってるのよ」

なるほどなるほど。

人間世界はいつの世も、同じようなものだった。

食後の紅茶を啜りながら、煙草に火を着けて一旦休憩をする。

「どうする、ウィンズ？」

「どうするって？」

イリツシュの言葉をそのまま返した。

「次期総統のことだよ」

そのことが。

「なるべき人になるよ」

「放っておくのか？」

「まあ、今のところは」

さらりと返答したなら、イリツシュは困惑の表情を浮かべた。隣のジタンは興味がないらしく、食後のお菓子で忙しい。

「師匠！」

話を振られたイメルダは、宥めるように話した。

「あたし達がどうこうするべきじゃないのよ、イリッシュ」
「どうしてですか!？」

まだ若い彼にはわからないのだろう。
『あたし達』がどういう存在なのかが。
そして自分もまた、そこに属しているということも。

「明日はイシュタリー山脈に行く。異議は聞かない。以上」
「ウインズ！」

客間に向かう間、あたしは決して、振り向かなかった。

「……いつかわかるわ」

イメルダの呟きだけが、静かに鼓膜を打った。

深々と白

翌朝、納得いかないのか微妙な面持ちのイリツシュと、道中のおやつを手につきうきなジタン、明らかに乗り気じゃないイメルダを引き連れて、あたし達は出発した。

大抵の人はイシュタリー北壁を通ってイシュタリー山脈へ行くらしいが、イメルダいわく、現在北壁は魔術師を逃さないように検問が厳しいらしい。

行きは揚々、帰りはこわい、てか。

「ただの魔女狩りみたいだね」

「実際そうなのよ」

狩られるのは魔女だけではないけれど。

そんなわけで、目指すはニヌルタの森だ。

ここを抜けて山脈へ行くのが、現状としてベストらしい。

が、

「さ、先に行つて！」

森の前で早速怖じ気づく魔女が約一名。

「何なの」

「ここ、出るんだって」

怯えた目であたしを見つめてから、貧血を起こしたのか演技なのか、ふら、とイリツシュに倒れ掛かるイメルダ。

何なのあんだ。

「師匠はオカルト系が苦手で」

「はあ？」

魔術師がオカルト苦手って、本当に何なのあんだ。

開いた口が塞がらない。

イリツシュは慣れているのか本当に心配なのか、やたらと労りを見せていた。

呆れ返った態度が気に入らなかったのか、あたしを指差してイメルダが叫ぶ。

「そ、そりゃあウィンズはさ、こわいものなんてないでしょうよ！風を操れるなんて、それこそもうオカルトみたいなものだし！？普通なら聞こえない音とかも聞こえちゃうわけで！？何あんだ、霊能者！？」

「魔術師だよ」

この能力で霊能者扱いされたのは、流石に、初めてのことだった。イメルダって、ある意味すごいと思う。

オカルトに弱い魔女を中央に据えて、さくさくと道なき道に行く。アギズス森林と違って一面真っ白なここは、痩せた木々からときどき雪が落ちる以外、鳥の囀りも葉擦れの音もなかった。

「静かだな」

ほとんど人が立ち入らないのか、あたし達以外には誰もいないように見える。

「そりゃあ出るくらいなもの。誰もいないわ」
「だいいけど」

すっかり怯えたイメルダは、自然そのものを忘れきっているようだ。

人が立ち入らなければ、そこは動物達の領域となる。どんなに過酷な状況下であろうと、共存の意味を知る動物達は順応するものなのだ。

もしかしたら、ジタンは大狼の姿の方がよかったかもしれない。

「ウインズ」

「どう？」

「ずっと見られてる」

森の途中からずっと警戒していたジタンは、周囲を観察しながらそう答えた。

やっぱり。

とはいえ、引き返すわけにもいかない。

風がないので、あたしが周囲を探ることも出来ない。

下手に風を起こして、敵意があると勘違いされても困るのだ。

ようやく気づいたのか、イリツシュの顔つきも険しいものになっていた。

「後どれくらいかしらねー？ もーやだわー」

……イメルダ、しつかりしろ。

がさつ。

そのとき、相手が動いた。

「止まれ」

どこからか声だけが、制止を求めた。
気配は する。

「皆、止まって……」

「ぎゃあああ！何！？何！？何事！？誰なのー！？やだーもー！」

「……イメルダを黙らせて」

「師匠、失礼します」

どす！と鈍い音がして、辺りは静かになった。
イメルダ、あんた出来た弟子を持ったよ。

「何故、森に行く」

声は至って冷静だ。

相手もまた同じ、警戒こそすれ敵意はない。

今のところは。

「イシュタリー山脈へ行きたいの」

「何故、北壁から行かない？」

「あそこだと魔術師狩りに遭うから」

声が返ってこない。

どう出てくる？

いざとなれば、土地勘はなくとも分はあるつもりだ。
伊達に二つ名持ちなわけじゃない。

がさ、がさ。

「名を聞こう」

「き、狐……？」

黄金色の毛並みに雪を纏った彼に、イリッシュは驚いてそう漏らした。

「ウインズ・ゼロムス」

簡潔に答える。

彼は狐ではない。

彼は、狐族（キツネ）と呼ばれる獣人族の一種であった。

一瞬、彼の瞳が鋭くあたしを射抜いたように思う。
気のせいかな？

首を捻ったあたしをよそに、彼はジタンにこう言った。

「よい主あるじのようだ」

ジタンが警戒を解き、周囲のそれも一斉に和らぐ。

そして、そこかしこから、わらわらと狐族が出てきた。

そして。

「して、何故にこの寒空を山脈へ行くのだ」

気絶したイメルダのこともあり、あたし達は狐族の里へ案内された。

人型をした彼は野性味溢れる中年男性であり、無精髭がよく似合う男前であった。

セダ・バイヨンと名乗った彼は、ここの族長であるらしい。

「ドヴェルグ族に会いに行くんです」

「ほう、して何故か？」

興味深くイリツシュを眺め、すぐに視線はその背中へと移った。

「それが理由か」

イリツシュは静かに頷く。

そのとき、転がされていたイメルダが目を覚ました。

「……ったー。ちょっとイリツシュ、あんた師匠に何を……!？」
「お主が黙らねば、わたしは実力行使に出たかもしれない。『氷の魔女』よ」

突然の言葉に、イメルダは完全に固まる。

現状把握が出来ていないらしいが、そのうちわかるだろうと放置することにした。

「^{がい}外界をよく知ってるみたいね」
「知らねば生き残れぬからな」

隠れ里として魔法陣が張られているのも、獣人ならではの理由があるのかもしれない。

「出るって噂は？」

あたしの問い掛けに、彼は笑った。

「出るなどとは笑えるだろう？死すれば土に還る、それだけだとい
うに」

「まあね」

イメルダを一瞥すれば、「だって」と呟いて真っ赤になっている。
まあ、魔術師がああ騒ぎじゃあ恥ずかしいわな。

「人間は見えないものに捉われがちでな、それを利用させてもらっているに過ぎん」

つまりは構うなと。

そういうことなのだろう。

では何故、あたし達を？

「不思議そうだな」

口角を上げたセダは、あたしの気持ちを讀んだかのように。

それはそうだ。

あたし達は魔術師、普通とは違えど人間でもある。

人間を嫌うというなら、姿を見せたりはしないはず。

「この子を連れていたから？」

ジタンに視線を投げ言ったなら、セダは柔らかく頷いた。

「それもある。主は人狼ぬしだな」

「みたい」

「みたい、とは？」

ジタンの返事に、今度は彼が不思議そうだ。

「ジタンは記憶がないの」

「ほう……こちらへ」

素直にセダの前へ行ったジタンを彼はまじまじと観察した。

耳の先から尻尾、グローブから瞳まで。

右のグローブでその視線が止まる。

「左手のグローブもだが……これはまた、珍しいものを持っている」
ブラックスター
「黒星石のこと？」

首を振ったセダは、薬指の小さな石を指した。
エイツがお礼だとしてくれた石だ。

「これは『ヴァラヴォロフの瞳』 『人狼の瞳』という名の同族
を守護する石だ」

あたしはそれを知らず、イメルダを見たなら、彼女もまた首を振った。

獣人には有名な話だとセダは続ける。

「それぞれ幾多の獣人族がいるが、そのみに伝わる宝玉というものがいくつか存在するのだ。魔石と違い、それは同族のみに伝承される」

どうやらセダは人狼にも知り合いがいるらしい。

流石はビーチエや『宵闇の兎』に名指しされるだけの武器職人。エイツのことを見直した瞬間でもあった。

運ばれてきた酒を煽りながら、セダはあたしを真っ直ぐに見た。

「その人狼の子だけではない。わたしは、お主の名を聞いて姿を現したのだ」

「あたし？」

嫌な予感がする。

「ウインズ・ゼロムス、白き髪と褐色の肌を持つ『風の魔女』。お主 あの『白き魔女』の血縁であろう」

的中だった。

イメルダは何とも言えない表情で黙し、ジタンはわけがわからない様子、イリツシュに限っては息を飲む音がはつきりと聞こえた。

「『白き魔女』って……あの、『白き魔女』？」

ようやく絞り出したような声で、イリツシュは震えながらあたしを見る。

首を傾げるジタンに、イメルダが小声で説明しているのを、視界の端で捉えて溜め息が漏れた。

そう　かのラジア・ゼルダが『伝説』と呼ばれるなら、『白き魔女』はさながら『悪夢』の象徴とでも言うべきか。

『白き魔女』の悪夢伝説は数知れない。

どこかで国が崩壊すれば黒幕は彼女だと言われ、戦争が起これば彼女の仕業だと疑惑が浮上し、傾国の美女が現れたと噂が立てば彼女だと囁かれ、悪人が権力を握れば立役者は彼女に違いないと皆口を揃える。

「……すごい人だね」

「そう、とんでもなくね」

ジタンの言葉に、イメルダまでもがうなだれてそう言った。

すごいのだ、冗談でもなくとんでもなく。
寧ろ、冗談ならどんなに救われたことか。

とにかく、悲しいかな、あたしの姉は間違いなく『白き魔女』だった。

「お主は外見年齢二十五歳程度というところか。腹違いと聞いていたが、何と言うか、全く似ておらん」
「唯一の救いでね」

隠すつもりはなかったが、わざわざ言うつもりもなかったことが露見して、何ともばつが悪い。
というか。

「会ったことがあるみたいな言い方だけど」

それはそれは悪名を馳せる姉ではあるが、実際、顔を見たという人物には会ったことがない。

何故なら、あいつに関わった者は皆、もう土に還っているからだ。
土に還れるだけの欠片でも残っていたなら、それこそ、その者は恵まれた方じゃないかと思うくらいだけれど。

あたしが生きていること自体、あいつの気紛れに過ぎないかもしれないことに、ときどき、ぞっとさえする。

セダはゆるりと黄金の尻尾を一振りして、口を開いた。

「少し昔の話だ。この森を男を連れて抜けて行っただのを見たことがある」

「男を？」

「ああ、金髪に鈍い灰色の瞳をした美男であつたよ。百年以上前だつたと思つたが」

知り合いにはいない男だ。

まあ、百年も前の悪事なら、現段階では気にしなくていいことかもしれない。

最後にセダは、からかうように笑つた。

「『白き魔女』より、お主の方がわたしは美人だと思うがな」

……余計なお世話だつた。

冗談で少しは雰囲気が紛れようかというとき、数人の狐族がばたばたと入ってきた。

「族長、森にイシユバジル兵が。魔術師も数人連れています」

誰を いや、何を追ってきたかは明らか気がする。

気のせいならいいけれど……

「客人を前に大変言いくいのですが、あの……どうやら『ダインスレイヴ』を探しているようで」

そうはいかなかったか。

どの程度の魔術師が来ているかわからないが、ここがばれる可能性は否めない。

あたし達は完全に、お邪魔虫だ。

「失礼しようか」

「悪いな」

「こつちこそ」

匿ってもらうわけにはいかない。

また、セダ達もそのつもりはないに違いない。

立ち上がったあたしに、セダは、自らの首飾りを差し出した。

「餞別代わりにこれをやろう」

ティアドロップ型のそれは透き通るほどの透明度を保ち、僅か七色に光っている。

「これは？」

「『透石』と呼ばれ、代々一族に精製法が伝わる宝玉だ。二人程度なら姿を隠してくれよう」

「いいの？」

受け取ったあたしに、セダは面白そうにこう言った。

「わたしは『白き魔女』が嫌いだな」

つまりはそれが言いたかったのかもしれないと、そんなことを思った。

「同感だね、あたしもだよ」

過去と狐と黒幕

ひたすらに積もりゆく雪の向こうに、ばらばらと人影がちらついていた。

追っ手は思ったより早く近づいていたらしい。

「あたしとジタンで何とかするから、二人はこれで先に山脈へ」

こんなとき、転移術が使えないことを悔やむが、あれを使える者などそうそういないのだから仕方ない。

「山脈へって……散り散りになつたら集合出来ない」

透石を受け取りはしたが、イリツシュは納得いかない様子だった。

「ジタンがいるから何とかなるよ」

「……たぶん」

何となく齒切れの悪いジタンに目配せしたなら、状況を読み取ったのか、今度はしっかり頷いて見せた。

足跡は流石に消せないだろうが、目視出来ないだけでも現状はかなり変わるはずだ。

いざとなれば、イメルダが何とかするだろう……たぶん。
ここは、彼女の手腕に期待するしかない。

里の結界から隙を見て、狐族こぎょの案内で上手く人気がない場所から先
立つ二人を見送った。

そしてまた、後方にちらつく人影に向けて風を巻き上げる。
本当ならあたし達も上手く逃げてもいいのかもしれないが、囿ひこけにな
った方が時間稼ぎくらいにはなるだろう。

ぶわつと起こった突風に数人が立ち往生しているのが、結界内から
見てとれた。

「行くよ、ジタン」
「うん！」

ぼふん、とおおかみへんげと大狼に変化したジタンに飛び乗り、勢いよく外界へと飛
び出した。

「期待しているぞ、『風の魔女』よ」

そう呟いたセダの言葉も真意も、今のあたしはまだ知らない。

「いたぞ！」
「あちらだ！」

方々からそんな声が聞こえて、さりげなく目を引くように当たらずとも遠からずな攻撃を仕掛けていった。

犠牲者を出したいわけじゃないぶん、何とも加減が難しい。

適当にあしらうのが一番だが、こっちが本当に適当にしていることがばれたなら、他の追っ手があの二人を探しに行ってしまうかもしれないのだ。

そう、あたし達二人に集中してもらわねば。

「ジタン、炎とか吐ける？」

ご丁寧に大狼サイズに変化している右手グローブに視線を投げたなら、「たぶん！」と曖昧な返事が力強くされた。

「たぶんて何」

「この姿でやったことないよ」

「あ、そっか」

だが、しかし！

そこは流石のジタン、後方に向けて鮮やかに色づく赤を吐き出して見せた。

流石だと唸るしかない。

雪上に一直線、燃える痕跡を残してやれば、わらわらとそれに人影がまた群がつていく。

何人かが巻き込まれたらしく声が上がるが、大したことはなく、連れの魔術師が水系魔術を施行しているのが見てとれた。

ばしゃあつと勢いよく真上から水を掛けられて……そっちの方がよっぽど拷問じゃなからうかと思ったのは、あたしだけだろうか。

と憐れみの視線を向けていたなら。

ガシャガシャガシャキ

ン！

「ウインズ、あれ！」

雪原を走り抜けるジタンの声に、視線を前方へと戻し、舌打ちが口を突く。

「イメルダ……あんのばか！」

木々を遥か越え粉雪を撒き散らし、そこには見事、巨大なる氷柱^{びすう}が幾重にもなつて空を貫かんばかりに出現していた。

イメルダが『氷の魔女』と呼ばれる由縁は、雪深き北の地を好むからだけではない。

水術系高等魔術である氷術系魔術を得意とし、魔力消費の激しいそれを惜しげもなく遺憾なく、迷惑を顧みずところ構わず使いまくる

からだ。

魔術師は大抵、元ある魔力を消費し老いていく消費型と、食物摂取や休養などで魔力回復が可能でありいつまでも外見は老いることのない持続型とに分かれる。

イメルダはまさに後者であり、食欲も半端ない上、元ある魔力自体もまた半端ない。

よって彼女は得意な氷術系を惜しげなく使用し、疲労速度も群を抜いて高いのだ。

ガシャ ン！

ガキ ン！

……またかよ。

何とか風を巻き上げ、炎で誘き寄せ、をやっているにも関わらず、追っ手はさつきより明らかに減りつつある。

そのぶん、前方の巨大氷柱は増えていくわけで。

「姿を隠してて、イリツシュがついてて、それで何でばれちゃうわけ？」

「目立ちたがりなのかなあ」

否と言えないところが痛い。

イリツシュでは、ストッパーとしては弱かったか。

「いたぞ、『氷の魔女』だ！」

「追え！弟子もきつとそちらにいるはずだ！」

「こちらの奴らは如何しましょうか！？」

そんな声が飛び交い、流石イメルダ地元で有名だね、とか呆れつつ思っていたなら、

「雑魚は放っておけ！行くぞ！」

ひとことが、ぴき、とあたしのこめかみを刺激した。

何だとう！？

ぴきき、と青筋が走るのがわかる。
それに伴って、ジタンに動揺が走った。

「ウイ、ウインズ？どうし」

「……見せてやろうじゃない。ねえ、ジタン」

「ウイ、ウインズ……？」

あたしだって、伊達に二つ名持ちじゃない。
あの悪女の妹という事実を知る者は少なく、実際、ごく僅かなものだ。

現にあいつと姉妹であることが有名だったなら、あたしはさながら

『黒き魔女』または『褐色の魔女』とでも呼ばれていただろう。

悪役みたいだけれど。

しかしあたしは『風の魔女』と呼ばれる。

それがどういうことか。

そこら辺を走り回っている魔術師との格の違いを！

伊達に永年『生き抜いている』わけじゃない実力の差を！

「今こそ見せてやらないでか！ね、ジタン！」

「あ、え、う、うん？」

いまいち的を射ないジタンの背中に後ろ向きに座り直し、こめかみに走る青筋はそのまま、後方に向かって雑魚と呼ばれたことに対しての怒声を上げた。

伝説の魔銃『ヴァーユ』を構えて。

「我、『風の魔女』なり！雑魚呼ばわりを後悔するが――い――わ

――！」

ドオオオン！

「……………」

「……………」

ニヌルタの森に、一瞬にして、大規模な街道が開通した。

としか、言えなかった。

「……………ウインズ、開拓業界の風雲児になれるね」
「……………上手いこと言うね」

上手いこと言ってる場合かどうかは置いてくとして。
吹き飛ばされた追っ手は大丈夫だろうか。

他人事のように、はらはらと巻き上げられた雪が舞い散る雪原で、
そんなことを思った。

これ……………使うときは、気をつけよう。

二人して遠い目をしていたなら、轟音につられたのか、追っ手の人数が戻ってきた気がした。

「おい、聞いたか!？」
「『風の魔女』だと!？」
「どうする!？」

ふん、恐れ入ったか!

らしからず悦に入っていたあたしが胸を反らした途端、またもや、どこぞからしたひとことに、あたしは衝撃を食らうことになるが。

「『白き魔女』殿に連絡を！」

「……」

「……『白き魔女』だって。あのとんでもなくろくでもないっていう、悪女のお姉さんじゃない？」

ね？と場にそぐわないほど可愛らしく首を傾げたジタンの適切で丁寧な説明に追撃を受け　あたしの中で、何かがぶっちんと、切れた。

『白き魔女』。

『白き魔女』殿？

『殿』ですって？

あいつが黒幕か！

「あ……えと、ウインズ……！？あの、えっと、落ち、落ち着いて」

ひゅう、と風が鳴く。

それは渦となり、あたしを中心に取り巻くように強く唸る。

「やばいぞー！」「逃げろ！」とか何とかかんとか。

聞こえたけれど聞こえない。
聞いてやる気はない。

あんた達は一人も逃がさない。

「ジゼルはどこ？」

自分でも底冷えするような声が、腹から這いずるように口を突いた。
慌てた誰かが放ったらしい無数の炎の矢を、指一つ動かさずに風で
吹き払う。

「もう一度言う。ジゼル・ゼロムス 『白き魔女』はどこにいる
？」

ジゼル・ゼロムス それが、悪女であるあいつの名前。
あたしと血を分けた腹違いの姉の名であり、何より あいつ自身
が引き裂いたあいつの母親の名でもあった。

覚えているのは、温かい手。

『白き魔女』の母親は、悪女の素質を生まれながらに兼ね備えてい
たあいつと違い、優しく慈悲深い魔女だった。
天使のような優しい笑顔と金色のウェーブした髪、真っ白な肌と金
色の瞳はそっくり娘に受け継がれていたが、心根は真逆であったの
が残念でならない。

彼女は母親の違ふあたしにもそれは優しく、ろくでもない女ったら
しな父親をとて愛していた。
だからあたしは、実母でなくとも彼女がすきだった。

覚えてるのは、温かい手。

温かく、彼女自身の生温かい血に染まつた真つ赤な手。

それは、あいつがあたし達のいた国を滅ぼしたとき、ついだとばかりに殺した彼女……あたしにとっての『ジゼル・ゼロムス』の最後の温かさ。

何百年経とうと忘れない。

何百年と追い続けてきた。

あの悪女『白き魔女』が、今、この国を掻き回している。

「あいつは何をしようとしているの？」

逃げ惑う追っ手を風で囲い込み、あたしは一步、前へ出る。
一步、奴らが後退したのがわかった。

「ズ、ウインズ！」

ジタンの声が聞こえない。

鼓膜を震わせるだけで、何も聞こえない。

あいつがいる、あいつがここにいる、あいつが、あいつが。

あいつが、

「荒れているな、『風の魔女』よ」

はつとした。

我に返ったあたしの前に、黄金色の狐がふるりと尻尾を一振りし、いつの間にか佇んでいた。

「……セダ……何してんの？」

「正気になったか」

ふわり、と取り巻く風が拡散し、優しく消えた。

そもそも、あたしの作り上げた風の障壁を突破してきたセダに、ぽかんと口が間抜けに開く。

いや……本来、獣人族は自然と共存している種族。

彼もまた、風に少なからず愛された者なのかもしれない。

「ここは我らの森。いくらお主であろうと、これ以上破壊活動に勤しまれては、狐族こぎつぐの長としてわたしが困るでな」

「ああ……ごめん」

言葉とは裏腹に、何故か彼は楽しそうに見えた。
あたしを見るその目が、そういった色を含んでいる。

不思議そうにセダを見つめているうち、追っ手は勢いを取り戻したのか、取り敢えずとばかりにこちらに突っ込んできた。

「ウィンズに楯突くなら、俺は許さないよ」

くあつと口を開けたジタンが、今度は、容赦なく炎を吐きつける。
あ、というまでもなく駆け出したジタンは、向かってくる敵をものすごい速さで、それはもうまさに蹴散らしていった。

「ふむ」

何をするでもなく、そんなジタンを眺める黄金色の狐は、一つ、空に向かって遠吠えをして見せた。

何を……？

手を出す必要もないかと、敵を次々伸していくジタンを遠目に捉えながら、あたしは訝しさから首を捻る。

そんなあたしをセダはまた、あの目で見返してきた。

あの、楽しそうな……如何にも興味深いと言わんばかりの目で。

「気に入った」

「は？」

「お主が気に入ったと言ったのだ。『風の魔女』 いや、ウィンズ・ゼロムスよ」

意味わからん。

やっぱり訝しむあたしを余所に、獣達の足音を風が運んできていた。

手出しはしないつもりだったんじゃないのか。

というあたしの思考に構うことなく、障壁の向こうに集まってくる狐族達。

一様に向けられるのは「早くこれを除_のけろ」と言わんばかりの彼らの目。

「そんなに関わりたくなかったんじゃないの？」

未だ暴れまくるジタンがうつかり殺_やつちゃうんじゃないかと心配しつつ、ゆったり構えるセダに問い掛ける。

まあな、と言いながらもやる気満々な彼を一瞥してから、ぱちんと指を鳴らした。

風の障壁が消える。

と同時に、残った緩い風を斬るようにして、狐族達は、一斉に追っ手に襲い掛かった。

「いいの？傍観者だったんでしょ」

「まあな。いいだろう、わたしはお主が気に入ったのだから」

どこら辺が？

聞いたなら答えてくれるのだろうか。

思慮深く見えた彼は、今やまるで若者のように目を輝かせ、あつという間に戦闘に加わってしまった。

体格も暴れ具合も虎の如き大狼ジタンと、その周りでどこか楽しげな　一回り小さなサイズの狐達。

一回り小さいと言ったって、普通の狼の倍くらいはあるけれど。飽くまでもジタンより小さいに過ぎないので、現場の迫力は計り知れない。

追っ手の顔が若干怯えて見えるのは、まあ……当然だね。

少しずつ少しずつ、中心に集められていた追っ手を取り囲んだかと思えば、一斉に、狐族が高らかに吠えた。ぱっ、と追っ手が消える。

暴れ回っていたジタンだけを綺麗に残して。

「え……何事？」

初めて見たそれに、あたしはぱかーん、と、口を開けて呆けてしまった。

転移術だ　しかも、かなり高等の。

ただ、あたしの知っているものと違うのは、遠吠えだけで転移したということ。

一斉に吠えたことが、詠唱の代わりということなのだろうか。

あの吠え方に、詠唱呪文は混じっていなかった。

あたしだって伊達に永きを生きているわけじゃない。

永きに伴って、それなりの知識はある。

あれが狐人族含めその古代言語でないことくらいは、わかるのだ。

「初めて見たか？」

「……うん……」

「見事だろう」

呆然として頷いたあたしに、未だ狐のまま戻ってきたセダが、満足そうに胸を張りながら雪を振り払った。

「これは狐人族でも、我々ニヌルタの者にしか出来ん」

ニヌルタの者にしか。

ニヌルタの一族代々に伝わる術ということだろうか。

「我々は代々、イシユタリーのドヴェルグ族と親交があつてな」

「え!？」
「まあ聞け」

さくさくと歩き出した大狐の後を、同じく、ぽかんとしながら寄ってきたジタンと共に歩いて行った。

「我々はイシュバジルの民を好いておらん。ドヴェルグ族殲滅に意味があつたとは思っていないのでな。人間は勝手だ。万物の頂点は、自分達であると傲慢にも思っている」

何も言えなかった。

事実、生態系ピラミッドの頂点は自分達であると、少なからず人間は思っているに違いない。

「あの殲滅……関わっていたのは誰だと思つか」

「誰って……聞いた話だと、今のイシュバジル將軍の地位にあるジエズ・アンファイって人のご先祖だつて」

「まあ、間違いではないな。率先して攻め入つたのは、あやつの先祖だが、」

「違うの?」

あたしは当時、この国付近にいなかったのも、ことの詳細に詳しくない。

セダの話し振りからして、まだ何かがありそうだった。

「裏にいたのは、お主のよく知る人物だ」
「あたしの……!？」

息を飲んだ。

あたしのよく知る人物。

セダの話し振りや、今までの『風の魔女』に対するこだわり様。

まさか

「……あいつか！」

あたしの頭で、金髪金瞳の絶世なる美女が、高笑いをした。

が、その幻影をこなくそとばかりに蹴散らす。

あいつ、あいつはどうしてこう、何十何百いや何千と悪事ばかりを働くのか。

そのうちの一回くらいは善き行いと言えるような何かをしているのか 否、それは残念なことに、思い当たることはない。

むしろ、あいつがそんなことをしている場面が、誠に残念なことに全く思い浮かばない。

……似合わない。

「ねえ、ウインズ」

「……何」

ひよこ、と場違いなほど可愛らしく首を傾げて、ジタンはまた、ずばん！とあたしに直球を投げた。

「美人て何しても何とか生きてられるんだねー」

「ジタン、それは彼女には言ってはならない」

「痛感しているのだから」まで言わなかったセダを誉めてやりたい。そんな気持ちで、隣にあった木を三本ほど、風で薙ぎ倒した。

それはそれとして。

「つまりだ。ろくでなしがこの国のろくでなしな誰かを唆したんだか騙くらかしたんだか寝落としたんだかして、現状がある　て可能性があるわけね」

「可能性はなきにしもあらず」

「だよ。現に『ダインスレイヴ』が狙われてるんだから」

あいつは魔剣『ダインスレイヴ』で、一体、何がしたい？

足を止めることなく考え込んでいたなら、すぐ先にまた、巨大な氷柱が何本か追加された。

騒ぎ立てながら氷柱で森を荒らすイメルダを思い浮かべ、長く息を

吐く。

白く色づいたそれを見つめていたセダが、ゆるりと黄金の尾を振った。

「どうする」

「どうするって、やるしかないしやらせるつもりなんですよ」

「まあな」

場違いにも穏やかに細められた焦げ茶の瞳には、しっかりとあたしが映っていた。

そう、始めからこの狐族（こねぞう）の長はそのつもりだったのだ。

そのつもりで姿を現し、そのつもりで透石を与え、そのつもりで助け船を出した。

ジタンがあたしの複雑な胸中に共鳴したのか、ひたとセダに一瞥くれる。

すぐさまあたしに向けられた視線は、あまり穏やかではなく、剣呑としていた。

「ウインズやりたくないなら、俺、倒してくるよ」

何をだ。

ジゼルか、セダか、はたまたこの国を引っ掻き回している先鋒か、下手したらイメルダなのか。

どれにしろ、今、それはよろしくない。

この子はいろんな意味で素直だから、やれと言ったらやるだろう。
危ない！

本当にやりかねない！

「やるよ！」

「わかった。わかったからくっつかないでジタン」

いつの間にか、ぎゅうぎゅうと涙目で抱きついてくるへたれ耳の彼に、また小さく息を吐いた。

「……あんたの誘いに乗るかな」

「それが賢明だな」

少なくとも、ここではね。

それは飲み込んで、増加の一途を辿る氷柱に向かって駆け出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2730p/>

l.o.method

2011年6月17日17時17分発行